

2022年2月1日

みずほディーラーズアイ (2022年2月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 113.00 ~ 116.50

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

■ 先月の為替相場

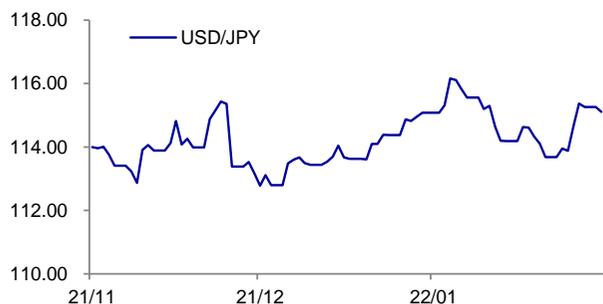
先月のドル円相場は米金利の高騰につられて年初に116円台に乗せたものの、株の調整局面入りから月半ばに下落し、FOMCを受けて月後半に再度反発する動きとなった。年初115円前半でスタートしたドル円は1週目、米金利の上昇にけん引される形でドル買いが進行。3日こそ小幅な上昇に留まるも、4日は堅調な株式市場も後押しして116円台にまで上昇し、月高値を116.35円まで更新。5日にはドル円のポジション調整の動きに一時115円後半に下落するもFOMC議事要旨の内容がタカ派であったことから米金利が下げ止まり、116円台に復帰。しかし6日に日経平均株価が下落する動きに115円台に下落。116円台での上値の重さが意識され、7日に発表された米12月雇用統計も非農業部門雇用者数変化が予想を下回ったことから115円半ばまで下落。2週目は10日の東京休日中に上値トライで115.85円をつけるもその後は伸び悩み、115円前半まで下落。利上げの織り込みが進み、上昇余地が限定的との見方が強くなるなか、11日のパウエルFRB議長公聴会が予想よりタカ派な内容でなかったことも下押しし、米金利が軟調推移となる。12日に発表された米12月CPIは記録的な高水準であったものの、想定範囲と受け止められドル売りが進み、114円前半まで下落。その後も上値が重い中、14日に日銀がインフレターゲットに到達する前に利上げできるか検討しているとの報道が伝わると円買いが進み、113.48円まで下落。ただし米長期金利が持ち直したことで114円前半に戻す。3週目は18日の日銀政策決定会合で緩和策の継続姿勢が示されると円売りが強まり、115.06円まで上昇するも、Fedの金融引き締めに対するリスクセンチメントの悪化から米株が大幅下落したことをあて反落。19日には米10年債金利が1.9%台まで上昇するも、リスクオフの流れにドル円は週を通して軟調推移となり21日には113円後半まで下落。4週目は24日にウクライナ情勢の緊迫化から月安値の113.47円まで下落。FOMC前は113円後半での小動きが続くも、26日のFOMC後のパウエルFRB議長の会見にて3月のテーパリング完了や利上げ開始に加え、バランスシート縮小にも早期に着手することが示唆され、想定よりタカ派な内容であったことから114円半ばまで上昇。27日の海外時間から米株式市場が持ち直したことでリスクオフの流れが後退してドル買いが進み、ドル円はじりじりと115円台に浮上。28日は株式市場の堅調推移にサポートされて115円半ばを挟んだ値動きとなり、31日も月末フローをこなしながら同水準での推移となった。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場は上旬に上値を試すがその後伸び悩み展開を予想。1月中旬はFedの年内利上げ回数を4回と織り込む形で金利上昇が一服したが、バランスシート縮小等のさらなる金融引き締めを予想する声にリスクアセットが売られ、株式市場は調整局面となった。それにもかかわらずFOMC後のパウエルFRB議長の発言は3月の50bps利上げの可能性も否定しないタカ派な内容であり、マーケットはその余波が消えていない状態だ。ただし株式市場は連日の荒い値動きから落ち着きを取り戻しつつあるようにも見受けられ、セッション局面入りはひとまず回避したと思われる。引き続きFed高官のタカ派な発言がトーンダウンしていないことに鑑みると、しばらくは米金利の上昇トレンドは継続すると見られる。上値の目安としてはやはり1月初めに到達した116円が意識されるラインだが、当初より利上げの織り込みが一段と進んでいることを考えると上抜けても不自然ではない。ただし、下落のリスクにも注意が必要だ。リスクとなる要因は大きく2つ考えられる。1つは株の調整局面入り。Fedの金融引き締めに対する反応は上記の通りだが、ウクライナ情勢の動向にも警戒したい。ロシアがウクライナに侵攻したという情報に対して、米国が制裁の準備を進めるため法案の制定に向けて議会での説明が今後行われる予定であり、軍事衝突とならずとも米露の関係悪化が懸念される。ロシアは世界有数の石油・天然ガス産出国であることから、供給網の遮断がさらなるコモディティ価格の高騰をけん引し、スタグフレーションに繋がることを警戒することになると、株式市場は再び下げに転じる恐れがある。もう1つは他の主要国中銀の金融引き締めによるドル買いトレンドの転換。2月はFOMCはないものの、RBA, ECB, BOE, RBNZと中銀イベントは目白押しとなっており、いずれも昨年下半年以降金融緩和からの脱却に向けた動きが出てきている。今後もFedに追従して金融引き締めを継続していくことが考えられ、他通貨に対してドルが売られることでドルインデックスが下落すること可能性がある。ドル円に切り取って考えれば円を買う要因がなくなると、世界的なドル売りの流れの中で上値が抑えられる動きは十分考えられる。以上のことから、株式市場の持ち直しが続けば116円に向けて上値を試す展開となることが考えられるが、上記のリスク要因が意識されるようになって方向転換する際は、急速なポジションの巻き戻しが入りうるため、ドル円の急落にも注意したい。

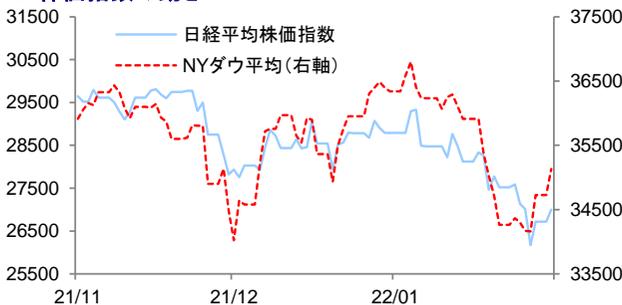
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	ISM製造業景況指数	12月	60.0	58.7	61.1
1/7	ISM非製造業景況指数	12月	67.0	62	69.1
1/7	非農業部門雇用者数変化	12月	450k	199k	210k
1/7	失業率	12月	4.1%	3.9%	4.2%
1/7	平均時給(前月比)	12月	0.4%	0.6%	0.3%
1/12	CPI(前月比)	12月	0.4%	0.5%	0.8%
1/13	PPI(前月比)	12月	0.4%	0.2%	0.8%
1/14	小売売上高(前月比)	12月	0.4%	0.2%	0.8%
1/27	FOMC政策金利	-	0.00%-0.25%	0.00%-0.25%	0.00%-0.25%
1/27	GDP(年率/前期比)	4Q	5.5%	6.9%	6.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	19名	117.00 ～ 113.50	ベア	2名	116.45 ～ 113.25	※ レンジは中心値
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------	-----------

田中	ブル	117.00 ～ 114.00	FEDはタカ派姿勢鮮明で市場は今年5回の利上げを織り込む動き。日米金融政策の差異が意識される一方、景気やリスク資産への悪影響も懸念され、ドル円は底堅いながら神経質な相場展開を想定。
矢野	ブル	117.00 ～ 114.00	米利上げが示唆される中、ここからは年内利上げ回数が焦点となる。オミクロン株の影響は色濃く残るものの、景気への悪影響は軽微にとどまると考えられることから、今月も下値の堅い展開を予想する。
筒井	ブル	118.50 ～ 114.00	下値を切り上げる展開を想定。高官発言やインフレ及びセンチメント指数に振幅を伴った推移をするが、米金利上昇傾向が下支え。米債券2年10年カーブがゼロ近傍になる時点で円高反転の可能性大
加藤	ブル	116.00 ～ 112.50	メディアにも40年ぶりのインフレの文字が踊り始め、特にエネルギー価格が高止まりの状況で、7月の選挙も視野に入れると何らかの手を打ってくる可能性がある。ポスト黒田議論の再燃は金融政策の舵取りの変化を予感させる。
伊藤	ブル	117.00 ～ 113.00	ドル買い継続も上値重い展開を見込む。既に年内利上げはほぼ5回相当が織り込まれている状況であり、さらに織り込みが進んでも117円程度が上値目処と考える。ただし、原油価格の上昇や日米金融政策スタンスを考えると下値は限定的。
山岸	ブル	117.50 ～ 113.50	1月FOMCで毎回の利上げを否定せず、インフレ抑制優先を鮮明にしたことで米金利先高観が強まり、ドルが買われやすい展開を予想。3月会合での0.5%利上げも想定され、不安定な相場状況下、リスクオフで円高が進む展開にも留意。
牛島	ブル	116.50 ～ 113.50	3月のFOMCで利上げすることが確実視され、市場はほぼ織り込み済み。米株は1月初旬を高値に大きく調整されており、軟調な株価はドル円・クロス円の上値を重くしそう。ドル円は底堅い推移を予想するも、レンジブレイクは難しそう。
尾身	ブル	117.00 ～ 113.00	次回FOMCは3月開催予定の為、今月は3月利上げ期待にサポートされたドル買いが継続すると予想。但し、株価の調整は引き続き懸念材料のため、局所的なリスクオフの円買いには警戒している。
上野	ブル	117.00 ～ 114.00	1月に113円台を付け下をやり切った感じもある一方、116円も重たい印象。次のFOMC・日銀はいずれも3月。2月中は基本線として金利・株を睨みながら地政学リスクに一喜一憂する方向感の乏しい展開を想定。
山口	ブル	116.80 ～ 113.80	1月FOMCでこれまで以上にタカ派シフトしたFed。経済指標の堅調さが確認されれば、米株の下落も限定的となり、米金利上昇と連動性してドル円は底堅い推移を継続すると予想。

甲斐	ベア	116.40 ～ 113.50	米金利上昇から米株下落や、ウクライナ懸念によるリスクオフ一巡。北京五輪中はロシアも行動を控えると思われる。ただし、閉幕が近づくと、その動向が再び意識されるほか、3月17日FOMCを控え米株調整開始でリスクオフ再燃を予想。
小野崎	ベア	116.50 ～ 113.00	利上げ期待も織り込み済みであり、期待感を背景としたドル円上昇は限定的。金利が上昇する中での軟調な米株上値を重くするものであり、1月月初に見られたような「米株・ドル安」といった展開が見られるか。
玉井	ブル	117.00 ～ 114.00	3月のFOMCに向けて利上げペースを探りながらの展開となりそうだが、3月50bp利上げ折込みや年内回以上の利上げ折込みが進む余地はあると考えている。利上げペース加速観測とともにドル円も底堅い動きとそう。
原田	ブル	116.50 ～ 113.50	米利上げ及びQTが目先見えてきている状況下、Fedは再びタカ派に傾斜。高インフレ率の継続で、より積極的なアプローチが言及される等、日米金利差は引き続き意識されるだろう。ドル円については、底堅い推移を見込む。
大庭	ブル	117.00 ～ 114.00	円安による日本経済への悪影響の懸念から、政府・日銀関係者から牽制発言が入ることには警戒しておきたいが、米国の金融政策が正常化に向けて動き始めることへの期待からドルに買いが入りやすい展開は継続。
上遠野	ブル	117.00 ～ 113.50	3月FOMCに向け、米国の年内利上げおよびQTペース加速観測に基づく米金利の上昇とそれに伴うドル買いの動きが継続か。株式市場へのネガティブインパクトや地政学的リスクに配慮しつつ高の展開を想定しておきたい。
小林	ブル	117.00 ～ 113.00	1月開催のFOMCを受けて、利上げ回数増やQT開始の議論等により、対他国の金融政策の観点で引き続きドル買いの展開を予想。一方で、地政学リスクや利上げを嫌気した株価の下落による一時的なドル円下落リスクに留意したい。
逸見	ブル	117.00 ～ 114.00	米国では3月利上げが規定路線となり、利上げ幅や今後のペースに焦点が移る中、日本は緩和路線継続。米金利上昇によるドル買い圧力は根強く、ドル円は底堅い推移を予想。
大谷	ブル	116.50 ～ 114.00	2月FOMCでは毎会合での利上げや50bpの利上げの可能性も排除されなかった。FRBがタカ派に傾斜する中でドルを売る動きにはなりづらくドル円は底堅い推移を予想。但しある程度市場で織り込みがされている状況下上値は限定的か。
鈴木	ブル	116.50 ～ 112.50	米ドルにとってポジティブな取引材料は一旦出尽くした印象。ただ3月の利上げに対する期待感は依然として根強く、米金利も高止まりの状況が続いており、ドル買い地合いが継続か。
大熊	ブル	116.50 ～ 113.50	米金利先高観を背景にドルの底堅さは継続すると思われる。株安や不透明なウクライナ情勢等リスクオフの局面では円買いの動きも見られるものの、日米の金融政策の違いからドル買いの方が強まりやすく、ドル/円は堅調地合いを予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1000 ~ 1.1500
EUR/JPY 126.50 ~ 131.00

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

■ 先月の為替相場

先月のユーロ/ドルは月初にユーロ買い優勢も後半にかけて弱含む展開。3日、1.1375付近でオープンしたユーロ/ドルは直後に上値を伸ばすも米金利上昇に伴うドル買いに1.12台後半まで下落。4日も米金利上昇を背景に下落も、その後発表の米経済指標の冴えない結果にドル売り優勢となり、1.13台前半まで反発。5日に前日の安値付近まで値を下げるも、ポジション調整によるドル売りが散見され1.13台半ばまで上昇。その後は、米12月ADP雇用統計の強い結果やタカ派のFOMC 議事要旨の内容を受けてドル買いが加速し、1.13台前半まで反落。6日はドル売りが優勢となり上値を伸ばすも、米金利上昇に伴うドル買いに押されて反落、終日を通し1.13を挟んでの揉み合いとなった。その後も1.13台での推移となるも10日、米金利上昇や欧州株式市場の軟調推移を背景に1.1285 まで急落。11日は1.13台前半で下落する場面も見られたが、海外時間に入り先述のパウエルFRB 議長の見解が材料視され米金利が低下、ドル売りが優勢となり、1.13台後半まで反発した。12日、ユーロ/ドルは1.13台半ば付近で狭いレンジでの揉み合いだったが、米12月CPI発表後の米長期金利急低下にドル売りが強まり、1.14台半ばまで急騰。13日は米経済指標の冴えない結果や米長期金利低下に伴うドル売りから1.1482 まで上昇、その後も高値圏を維持した。14日には米1月ミシガン大学消費者信頼感指数を受け米金利上昇する中で下落を見た。17日は欧州時間にかけて1.1434まで上値を伸ばすも、その後はやや材料難となった。18日米金利上昇や欧米株式市場の冴えない動きに1.13台前半まで急落。19日は下げ幅を広げるも米長期金利低下に伴うドル売りからじり高に推移して1.13台半ばまで上昇した。20日、米金利低下に伴うドル売りや独12月生産者物価指数の強い結果に1.13台後半まで値を上げるも、その後は米長期金利の下落幅縮小を受けてドル買い優勢となり1.1303まで下落した。24日はウクライナ情勢を巡る警戒感からリスク回避の動きが活発化し、1.12台後半まで下落。売り一巡後は再び1.13台前半まで反発も、やや方向感を欠く値動きとなった。25日も前日の流れが継続して一時1.12台半ばまで下落。26日は1.13台まで上値を伸ばすも、FOMCでのタカ派色の強い情報発信を受けて米長期金利が急上昇し、ドル買いが優勢となり1.12台前半まで値を下げた。27日、前日のFOMC の結果を受けた取引が続き、海外時間でも米経済指標の良好な結果が確認されると、1.1131 まで急落。28日もドル買いに押される展開に1.1122まで下落するも、予想を下回る米経済指標に1.1174まで値を戻した。

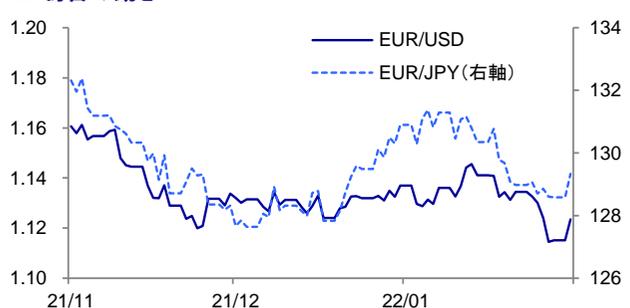
■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は上値を迫る展開を予想する。1月は1.1375付近でオープンしたユーロ/ドルであるが月末には1.11台とユーロ売りが優勢となる動き。ユーロ売りの主因は金融政策の違いによるドル買いと考えている。まず、米国側に目を向けると今回のFOMCでの主な注目点は①3月の利上げ②バランスシート縮小について③年内利上げ回数と考えている。①3月利上げについては声明文の中で『インフレ率が2%を大きく上回り、労働市場が堅調であることから委員会はFF金利の目標誘導レンジの引き上げが間もなく適切になると予想』とされ3月利上げを示唆する内容であり、利上げ幅には言及されていないものの利上げ自体は既定路線となった様子。②バランスシート縮小については、時期は触れず、あくまで「利上げ開始後」といったところで明確ではないものの「バランスシートは必要以上に大きくなっていることから、顕著な縮小が必要である」と指摘。同時に、次回の3月会合で、バランスシートのロードマップを作成する予定であることを示した。③年内利上げ回数については、パウエルFRB議長会見では「毎回のFOMCで金利を引き上げる可能性を否定しない」と話しており年4回以上の利上げも辞さない姿勢であった。一方でECBは12月の会合にてPEPPの3月末終了を決定し、金融正常化に向けて着実に歩を進めたが、本枠組みは必要があればいつでも再稼働が可能とされ、また、激変緩和措置としてAPPによる購入額の引き上げが決定された。また、利上げ時期は見通せずタカ派シフトとはなっていない。

しかし、今後を見通す上では市場での織り込み具合も勘案すべきところか。既にFRBの利上げ姿勢は織り込みを見せている一方でECBの政策運営にはタカ派を織り込む余地を残す。ウクライナ情勢等、懸念すべき事象はあるものの軍事衝突回避との声が優勢である点から、回避を見通しの前提とするのであれば、今後の金融引き締め期待を残すユーロに買いが入る展開も想定される。水準的にも節目となる1.10ではこれまでも値を返される展開が散見されており、今月は上値を迫る展開を見ておきたい。

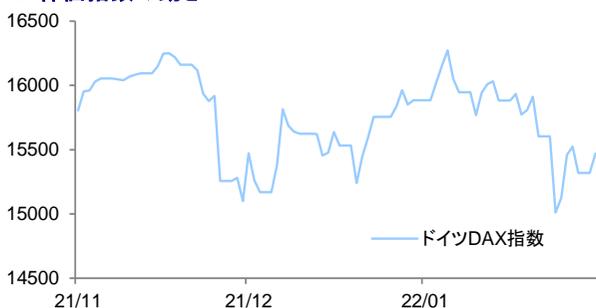
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/6	ドイツ製造業受注 (前月比)	11月	2.3%	3.7%	-6.9%
1/7	ドイツ鉱工業生産 (前月比)	11月	1.0%	-0.2%	2.8%
1/18	ドイツZEW景気期待指数	1月	32.0	51.7	29.9
1/20	ユーロ圏CPI (前年比)	12月	5.0%	5.0%	4.9%
1/24	ユーロ圏マークイット製造業PMI	1月	57.5	59.0	58.0
1/24	ユーロ圏マークイットサービス業PMI	1月	52.0	51.2	53.1

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	2名	1.1450 ～ 1.1000	ベア	19名	1.1300 ～ 1.0950	※ レンジは中心値
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------	-----------

田中	ベア	1.1350 ～ 1.1000	金融政策の正常化に向けECBもFEDに追随姿勢を示しているがスピード差あり。また熾り続けるウクライナ情勢は長期化が予想され、ユーロドルは下値リスクが意識された相場展開が続こう。
矢野	ベア	1.1300 ～ 1.1000	欧州においては、オミクロン株に関する不安感他国に比べて早いスピードでピークアウトに向かいつつある。ただ、金融政策においては米国では連続利上げが見通される等先行していることから、EURは対ドルでは弱含み推移となろう。
筒井	ベア	1.1300 ～ 1.0950	米金利上昇あるいは高止まりを背景にしたユーロ安を展望。更に現在の露・ウクライナ情勢が継続する限り、通貨ユーロは売られ米ドルに還流しやすい状況。
加藤	ブル	1.1400 ～ 1.1000	ウクライナ問題の行方次第ではあるもの、足許でのユーロ売りには過熱感があり、本来の貿易黒字経済圏であることにも鑑みればEURが調整的に買戻される可能性が高いと思う。
伊藤	ベア	1.1400 ～ 1.0950	インフレ高進を理由にFRBを始めとした各国中銀のタカ派姿勢が強まっているが、ECBについてはハト派継続を見込む。既にユーロは年内利上げが織り込まれているため、ハト派姿勢はユーロの売り圧力につながるだろう。
山岸	ベア	1.1400 ～ 1.0900	米金融引き締めでドルが買われやすく、ユーロドルは軟調推移を予想。ウクライナ情勢に加え、株価中心としたリスクオフの強まりも対ドル・対円でのユーロ売り材料。CPIが過去最高となり、ECBで強いインフレ警戒が示されるかに注目。
牛島	ベア	1.1300 ～ 1.0900	米国が利上げ目前であることから相対的にユーロが売られやすい地合いは継続するとみられる。ウクライナ情勢の不安定化も欧州大陸が嫌気される要因として作用する可能性もあり、EURは1.10割れをトライするだろう。
尾身	ベア	1.1400 ～ 1.1000	月初のECB会合に注目。FRBが引き締めを急ぐ中、今までと同じペースの金融政策と理解されるとユーロ売り。バランスシート規模縮小などの期待を煽れると相場は膠着しそう。
上野	ベア	1.1400 ～ 1.1000	きな臭いロシア・ウクライナ情勢や、欧米の金融政策面を鑑みても、敢えて今ユーロポジションを積み増す動きをする要因を見出しづらい。基本的には他通貨に対してユーロが弱含み展開を想定。
山口	ベア	1.1400 ～ 1.0900	ユーロ圏は引き続き新型コロナウイルスの感染再拡大とロックダウンリスクが実体経済へ悪影響を及ぼす可能性残されており、ECBの金融政策正常化はまだ先と予想。経済指標の悪化が続くとEURはもう一段の下落に警戒したい。

甲斐	ベア	1.1200 ～ 1.1000	一段の米金利上昇期待からドル買いは継続を予想。2月3日にECBを控えるが、ラガルド総裁は米国対比インフレ懸念が低いことなどを理由としてスタンスを貫いている。明暗が一段と分かれることで、ドル買いユーロ売りが継続すると予想。
小野崎	ブル	1.1500 ～ 1.1000	織り込み済みのFRBの金融引き締めに対し、タカ派期待への余地を残すECBという点でEUR買い優勢の局面を想定。水準的にも1.10付近では値を戻される展開が散見されており今月は上値を追う展開を想定。
玉井	ベア	1.1350 ～ 1.0800	明確にタカ派転換しているFRBや再利上げが見込まれるBOEと比べECBのハト派姿勢は目立っており、相対的にEURは買われづらいだろう。ウクライナ情勢をめぐる懸念もガス供給をロシアに頼っているユーロの重しとなろう。
原田	ベア	1.1300 ～ 1.0900	米国の利上げが加速する可能性もある中、ウクライナ情勢及びエネルギー価格高騰によって、ユーロを積極的に買う地合いではない。金利差も意識される中、引き続き軟調な推移を予想。
大庭	ベア	1.1300 ～ 1.1000	ECBの正常化プロセスは1年以上先になる思惑や、ウクライナ情勢緊迫化による地政学リスクの高まりから上値は重い展開は継続。但し、足元ユーロが売られ過ぎの見方もあり、一時的に買戻される場面はあろう。
上遠野	ベア	1.1300 ～ 1.0900	俄かに年内金融緩和縮小に向けた期待が燃えるものの、変異株再拡大を受け欧州経済の持ち直しは想像以上に遅行している印象。正常化プロセスの対主要国劣後感からEURは重い展開を想定。ウクライナ情勢の緊張も引き続き上値を抑えよう。
小林	ベア	1.1500 ～ 1.0800	ECBとタカ派のFRBによる金融政策差の観点や、ユーロ圏におけるコロナ感染拡大でロックダウンによる実体経済への影響等により、ユーロは引き続き軟調推移を予想する。一方で1.10割れでは押し目買いが考えられ、下値は限定的か。
逸見	ベア	1.1350 ～ 1.1000	ECBもタカ派化しているものの、正常化プロセスに拍車がかかった米国には遠く及ばず、金融政策の差からユーロの軟調地合いを想定。不安定なウクライナ情勢についてもユーロの重しであろう。
大谷	ベア	1.1300 ～ 1.1000	米国が利上げやQTに向かう中、引き続き金融政策の格差からEURは上値重い推移を予想する。またウクライナ情勢の緊迫化を受けた地政学リスクの高まりもユーロの上値を抑えると考える。
鈴木	ベア	1.1300 ～ 1.0900	金融緩和縮小に対する当局のスタンスの違いから、対ドルでのユーロは売られやすい地合いが継続。ウクライナ情勢等の懸念もあり、引き続き軟調な推移が予想される。
大熊	ベア	1.1300 ～ 1.0900	米金利先高観が引き起こした株安や、ウクライナ情勢の緊迫化による原油高が欧州経済の重しとなっている。また、金融政策正常化を進めるFRBや英中銀とECBのスタンスの違いからもユーロは軟調な動きを予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3200 ~ 1.3800
GBP/JPY 149.50 ~ 158.00

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

■ 先月の為替相場

先月のポンド相場は、動意に乏しく、全主要通貨に対してほぼ横ばいに終わった。

唯一方向感が期待されたな通貨ペアは、12月の半ばから明確な上昇基調を続けていたポンドドルだった。13日と14日に、200日線の1.3740レベルで推移し、高値1.3749を付けた。しかし、200日線の上抜けは一時的なものとなり、終盤にかけて下落する展開となった。

ユーロポンドは小動きとなった。20日にラガルドECB総裁の同日の「欧州中銀が、米連銀ほど迅速に行動(利上げ)しない十分な理由がある」という発言を受けて、0.8306まで下げて22か月ぶりの安値を更新した。しかし、その後は様子見となり値幅は110ピップと過去一年で最小となった。(過去一年の毎月の平均値幅は204ピップ)。

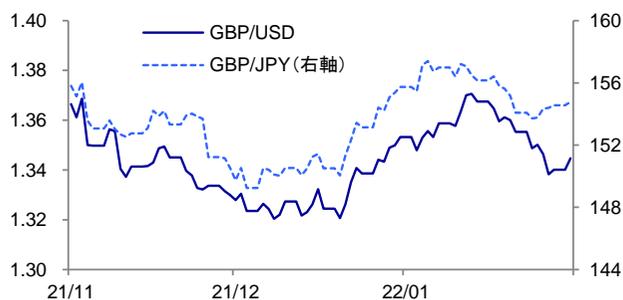
終盤にかけて英ポンド相場は、対ドルでは1.37台から1.35台、対円では156円台から154円台へと、ほぼ一貫した軟調推移で水準を切り下げた。対ユーロでもポンド高は減速し、横ばい推移となった。軟調の背景は、英政局の混乱と考えられた。一般市民がコロナ禍下で厳しい行動制限を強いられた最中に、首相官邸など政権中枢の一部の職員たちが頻りに宴会を催していた事実は、それまではポンド安の要因にあまり働きかけていなかったように思われた。しかし、レベルアップ・住宅・コミュニティー省のスー・グレイ第二事務次官が独自調査を進めているが、加え、彼女の警視庁への情報提供も報道され、警視庁が同パーティー疑惑の捜査を開始したことが明らかになると、政局不安からポンドは全面安となった。

■ 今月の見通し

ロンドン警視庁も英首相官邸のパーティー疑惑の捜査を開始したことで、上述のスー・グレイ第二事務次官による独自調査の報告書の公表が2月の上旬となるとされている。ジョンソン首相に対し報告書を提出し、首相はその内容を公表するものと見込まれている。その内容はもちろん、規制違反判明の有無で、ポンドの動きに影響するものとなるだろう。しかし、もっとも注目しておきたいのは、与党の党首不信任投票実施(保守党国会議員360人中54人の不信任状提出が条件)、その後の不信任成立(同180人超の不信任が条件)である。首相交代は、勿論、政局不透明感という意味でポンドには売り要因と思われるが、一方で、ここまで有権者の支持を失ったジョンソン首相が続投するのも、英政局の安定には決して肯定的に評価できる展開とは思えない。とりわけ、5月に予定される英地方選に向けて、与党保守党は厳しい選挙戦を強いられることになるのではなかろうか。どちらに転んでも、ポンドが好感して、上昇するような展開は考え難いように思われる。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	製造業PMI	12月	57.6	57.9	58.1
1/6	サービス業PMI	12月	53.2	53.6	58.5
1/6	建設業PMI	12月	54.0	54.3	55.5
1/14	GDP(前月比)	11月	0.4%	0.9%	0.1%
1/14	鉱工業生産(前年比)	11月	0.5%	0.1%	1.4%
1/18	ILO失業率	11月	4.1%	4.1%	4.2%
1/19	消費者物価指数(前年比)	12月	3.9%	4.2%	4.0%
1/21	小売売上高(含自動車/前年比)	12月	3.4%	-0.9%	4.7%
1/24	製造業PMI	1月	57.6	56.9	57.9

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6900 ~ 0.7300
AUD/JPY 78.80 ~ 84.30

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

1月の豪ドルは年明け3週間は0.71台前半から0.73台前半のレンジで推移していたものの、27日(シドニー時間)タカ派姿勢のFOMC会合を機に市場では米国利上げ織り込みが進行した事や、ウクライナ情勢でリスクセンチメントが悪化した事が豪ドルの重しとなり、月末に0.70を割った。年初より米国の利上げ前倒し期待の高まりや社債の新規発行多発で米債金利上昇が継続していたが、18日、米国債利回りが一段と上昇し、米株価が急落、豪ドルも値を下げ一時0.7170近辺まで下落した。19日もこの流れを引き継ぎ米10年債金利は年初来高値1.90%付近まで上昇。豪金利も追従して上昇する中、豪ドルは0.72台へ戻した。20日、予想以上に堅調な豪12月雇用統計を受けて、豪ドルは瞬間的に0.7260近辺まで上昇したが滞空時間は短く米株が下落するのを横目に0.72前半まで戻した。21日はウクライナ情勢が懸念されリスクオフムードが強まる中、軟調な株価を背景に債券に買いが入り、豪国債利回りは大きく低下した。豪ドルは0.7180近辺まで下落。24日、ウクライナ国境付近でロシア軍部隊が集結し大規模な軍事行動を計画しているとの報告を受け、米英の在ウクライナ大使館職員の退避命令が発表された。地政学的リスクの高まりに加え、各国PMIの結果が総じて冴えなかったこともリスクセンチメントの重しとなり、豪ドル安は一時0.70台後半まで進行した。27日はFOMCおよびパウエルFRB議長会見で、「近いうちに利上げすることが適切」とし、3月会合のタイミングでゼロ金利政策の解除を示唆した。又、QEは3月初旬に終了すると表明し、保有資産の縮小に関しては利上げプロセス開始後に始めるとの見通しを示した。利上げスピード、利上げ幅ともにタカ派姿勢がみられ、米国債利回りが短期ゾーンを中心に急上昇。豪ドルは0.7080まで下落した。その後発表された米Q4GDPが市場予想を大幅に上回り、約40年振りの高成長となった事を受けて米利上げ織り込みが更に進行。ドル買いとなる中、豪ドルは下値を追う展開となり0.7030近辺まで下落した。28日は米利上げ織り込みが進行の流れを引き続き、また米上院でロシア制裁法案で合意が近づくと、ウクライナ情勢に関わる地政学リスクの高まりを受け豪ドル安は0.69台まで進行した。

■ 今月の見通し

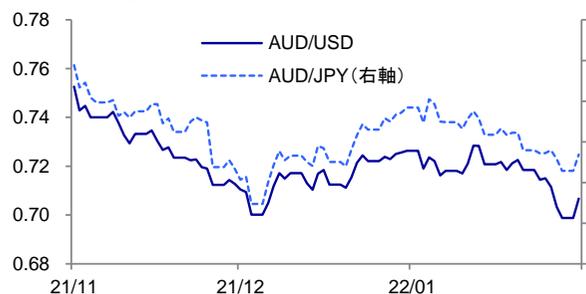
今月の豪ドルは重く推移する展開を予想する。足元、市場では現行の豪政策金利である0.1%から今年6月までに0.25%への利上げが織り込まれており、8月までに0.5%、年末までに1.0%に達すると織り込まれている。直近2021年12月の失業率が過去最低水準付近の4%台前半であった事や2021年4Q豪コアCPIがRBAのインフレ目標レンジである2-3%の後半まで上昇した事を踏まえると、今回のRBA会合でQE全撤廃のアナウンスがあっても違和感はない。但し、インフレ圧力が高まる中で賃金上昇が軟調な為、実質賃金が目減りしていくのではとの懸念も聞かれる。また、豪州各地でオミクロン変異株が感染拡大している状況も懸念材料として燻る。故に今回当局がQE全撤廃し、且つフォワードガイダンスでインフレ見通しを上方修正する事により短期的な豪ドル上昇は期待できても明確に初回利上げ時期が年内にあると予測するのは時期尚早であると考ええる。

一方米国では1月25日-26日に開催した定例会合では利上げ開始が「近く」適切になるとの認識が示されたほか、利上げ開始後に債券保有を縮小すると示唆され、対豪州での政策引き締め時期と圧力が際立った。加えて1月27日に発表された2021年4Q米GDP(速報値)は個人消費に支えられ6.9%(市場予想5.5%)と37年ぶりの高成長を記録した。更に1月29日にはFRBが注目するPCE(個人消費支出)は5.8%増となり、39年ぶりの高水準を付けた。FRBが物価抑制に向けて動く材料は既に十分揃っている。今後、FRBの引き締め路線が際立つ場面では米株の調整も見られよう。

また、この他の材料としてウクライナ情勢における地政学リスクの高まりや米国でロシア制裁法案が合意に近づいていることからリスクセンチメント悪化は長期化する可能性が高い。このような背景から今月は豪ドルは重く推移すると思われる。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/10	住宅建設許可件数(前月比)	11月	3.0%	3.6%	-13.6%
1/11	貿易収支	11月	A\$10550m	A\$9423m	A\$10781m
1/11	小売売上高(前月比)	11月	3.6%	7.3%	4.9%
1/20	失業率	12月	4.5%	4.2%	4.6%
1/20	正規雇用者数変化	12月	-	41.5k	128.3k
1/20	非正規雇用者数変化	12月	-	23.3k	237.8k
1/20	参加率	12月	66.2%	66.1%	66.1%
1/25	CPI(前年比)	4Q	3.2%	3.5%	3.0%
1/25	CPIリム平均値(前年比)	4Q	2.3%	2.6%	2.1%
1/28	PPI 前年比	4Q	-	3.7%	2.9%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2400 ~ 1.3000
CAD/JPY 87.00 ~ 93.00

米州資金部カナダ室 金本 玲子

■ 先月の為替相場

年明けから米早期利上げに対する期待感を背景に米長期金利が上昇、USD/CADは1.2637でオープン。月間安値は1.2457(1/20)、月間高値は1.2809(1/6)。5日、12月のFOMCの議事要旨が公開され、利上げ予定時期の前倒しやバランスシートの縮小に着手すべきとの考えが示されていたことが明らかとなり、市場はこれを予想よりもタカ派と判断。議事要旨公開後は米長期金利が上昇、米株式相場は下落、USDドル買いが進みUSD/CADは1.27台後半へ上昇。6日は原油価格(WTI)が急上昇。オミクロン株拡大による原油需要減への懸念はあるものの、OPECプラスが2月も現行の増産ペースを維持、それ以上の増産を決定しなかったこと、また中東情勢による供給懸念も伴い、1バレルU\$80周辺で推移。7日、米・カナダともに12月の雇用統計が発表され、米12月非農業部門雇用者数は前月比19.9万人増と、市場予想45万人増を大きく下回る結果となった。一方失業率は前月の4.2%から3.9%へ低下、市場予想も下回る改善となった。カナダ12月雇用者数変化は、市場予想の2倍以上となる5.5万人増となり、失業率は前月の6.0%から5.9%へ低下。これを受けカナダドル買いが進み、USD/CADは1.27台から再び1.26台へ下落。11日にはパウエルFRB議長がインフレ制御に向けた金融政策正常化を急ぐ方針を示したものの、利上げについての詳細は示されなかったため、早期利上げの警戒感が後退、主要通貨に対してUSDドルが売られ、USD/CADも1.25台へさらに下落。また11日以降はオミクロン株によって原油需要の回復は頓挫しないとの見方や米景気回復期待の高まりなどを背景にWTIが上昇を続け、13日には1バレルU\$83近くまで上昇、USD/CADも一時1.24台を付ける。その後も原油需要拡大、供給懸念へのヘッドラインによりWTIの上昇が続き、20日には1バレルU\$87台まで上昇。しかしその後は20日の米エネルギー情報局(EIA)による米原油在庫増加の発表を受けてWTIは反落。週明け24日はウクライナ情勢および米早期利上げに対する懸念によるリスク回避の動きから、米・カナダ株式相場は下落、WTIもつられて下落したことにより、USD/CADは一時急上昇し、1.2702を付ける。26日、カナダ中央銀行政策金利決定会合では利上げに踏み切るとの見方が強かったものの、オミクロン株による経済への影響などを要因とし、政策金利は0.25%に据え置かれた。また同日午後のFOMCでは、政策金利は据え置き、声明文は予想通りだったものの、パウエル議長の会見での発言がタカ派ととらえられ、USDドル買いが進み、USD/CADは上昇。その後もUSDドル高の流れが続き、28日までUSD/CADは1.27台での取引が続いている。

■ 今月の見通し

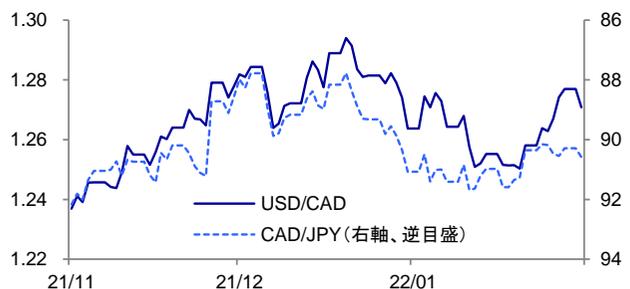
2月のUSD/CADは1.24-1.30での推移を予想。オミクロン株によるコロナ感染者数急増を受け、年始からカナダ各州は行動規制を再強化した。重症化は避けられるとの見方や、ワクチンのブースターなどにより、一時的な混乱はすぐに収まり、また1月中旬以降、新規感染者数は大きく減少している。1/7発表のカナダ12月雇用統計や、1/17発表のカナダ中央銀行による2021年第4四半期Business Outlook Surveyなど、オミクロン株による感染拡大の影響が反映されていない経済データもあり、2月に発表される経済指標が注目されるものの、オミクロン株の影響がこのまま鎮静化すれば、インフレの勢いが強まっている状況も考慮すると、現在市場が織り込んでいる通り、3月会合での0.50%への利上げが予想される。2月末のパウエル議長の「政策金利をまもなく引き上げるのが適切」との発言から、FRBも3月のFOMCで利上げを開始すると見られており、年内で計4回の利上げが行われる観測が高まっている。米利上げ期待が高まり、さらに利上げペースの加速が予想されるような発言や経済指標の結果が出れば、USDドル買いが進み、USD/CADが1.29近くまで上昇する可能性が考えられる。原油価格に関しては、ウクライナ情勢悪化や中東の政情不安などによる供給減により、引き続きWTIが上昇する可能性が考えられる。地政学リスクが解消された場合でも、OPECプラスの生産調整により原油価格が大幅に下落することは考えにくいと思われ、2月は1バレルU\$70台後半-80台後半で推移すると予想。USD/CADに関しては、全体としてUSDドル高が続くと予想されるものの、原油高がカナダドルをややサポートし、2月のUSD/CADは1.24-1.30での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の床屋・美容室事情』
昨年のパンデミック中、カナダでは床屋・美容室は完全に閉めなければならない時期があり、お店はオープンできずに大変だったのはもちろん、髪が伸びきってしまったストレスを抱えた人や、また自分でヘアカットを試みた人も多かったようです。私もYoutubeを見ながら初めて自分のヘアカットにチャレンジしてみた一人ですが、美容院が再開してからしっかり直してもらいました。床屋や美容室は街を歩くと結構たくさん見かけると思います。トロントをはじめ都市部では日本人が経営していたり、日本人のスタッフがいるヘアサロンもたくさんある印象です。カナダで美容室に行ったことは数えるほどしかないのですが、こちらの美容室で髪の長い人がカット、カラー、ブリーチ、パーマなどをすると日本と比べてかなり値段が高くなると思います。そもそもカラーやパーマの料金が日本ほど安くないのですが、美容室もサービスに対してチップを払うため、全体としてよりお高めになってしまいます。カットだけであれば40~80ドルくらい、床屋であれば短髪だと20ドルくらいからカットしてくれるところもあるようです。カナダに来た当初、だんだん髪の毛がギンギンになり、櫛の通りが悪くなってしまったのでなぜだろうと思っていたら、日本との水質の違いによるものだったようです。トロントの水道水は中硬水と言われているので、日本の軟水と比べて髪の毛がゴワゴワになりがちだそうです。またカナダは乾燥していて、紫外線も強いので、髪へのダメージも大きいかもしれません。日系の美容室だと、日本のジャンパーやトリートメントを取り寄せていたり、日本人の髪質のことをわかっているのも、何かトラブルがあれば相談できて安心です。また美容学校やカレッジの美容系コースの生徒が練習用にお客さんを募集しているところを探すと、リーズナブルな値段でカットやカラーをしてもらえます。

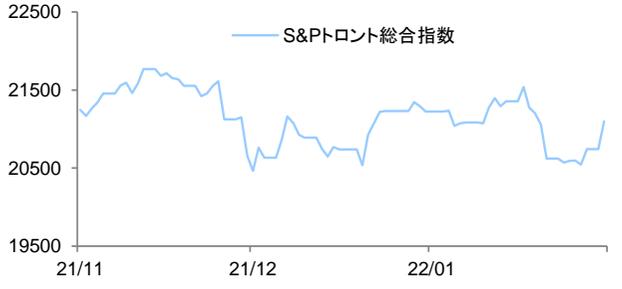
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	マークイットカナダ製造業PMI	12月	-	56.5	57.2
1/6	貿易収支	11月	2.03b	3.13b	2.09b
1/7	ネット雇用者数変化	12月	25.0k	54.7k	153.7k
1/7	失業率	12月	6.0%	5.9%	6.0%
1/17	製造業売上高(前月比)	11月	3.0%	2.6%	4.6%
1/19	CPI(前月比)	12月	-0.1%	-0.1%	0.2%
1/19	CPI(前年比)	12月	4.8%	4.8%	4.7%
1/21	小売売上高(前月比)	11月	1.2%	0.7%	1.5%
1/26	カナダ中央銀行政策金利決定会合	-	0.25%	0.25%	0.25%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1180	~	1230	(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.346	~	9.804	
	JPY/KRW	10.200	~	10.700	

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

1月のドル/ウォン相場は月後半にかけて底堅い展開。3日は1,186.9ウォンでオープン後は週末発表の米雇用統計や1月のFOMCでの早期利上げ期待上昇による警戒感から米長期金利が上昇する中、ドル/ウォンの上値は軽く、ドル/ウォンは1,200の大口を回復。1,200越えでは水準感から輸出企業によるウォン買いも散見されたものの、6日発表のFOMC議事要旨で従来想定よりも早期かつ迅速に利上げに踏み切る可能性があるとの見方が示された。他、Fed高官による3月の利上げも可能とのタカ派発言もあって、7日にドル/ウォンは月高値1,204.2まで上昇した。翌週は期待外れに終わった米12月非農業部門雇用者数を受けて1,198.8ウォンでオープン。膠着状態だった週初から一転、週半ばにかけては、今年の早いタイミングで開始されると警戒されていたバランスシート縮小開始時期について年後半の公算が大きいというメッセージがパウエルFRB議長より発せられると米金利が低下。ドル/ウォンも徐々にレンジを切り下げた。しかしその後は1,190ウォンを下回る水準での実需のドル買いで下値も堅く、週末にかけてはBOK会合も控える中で様子見ムード。14日のBOK会合では政策金利の利上げ(1.00%→1.25%)を発表し、BOK総裁が記者会見でインフレ圧力を強調して追加利上げ可能性を示唆するとドル/ウォンは下落し、翌週18日には週安値1,185.8まで下落した。しかしこの水準では、実需のドル買いが散見されたほか、27日に控えたFOMCを前に投機的なドル買いの流れも強く、ドル/ウォンは反発。さらにロシアとウクライナを巡る地政学リスクの高まりも意識されドル/ウォンは底堅く推移した。27日FOMCではFEDの3月利上げが示唆されたことに加え、パウエルFRB議長が今後会合の度に利上げする可能性についても否定しなかったことから、米長期金利が急上昇し、月末にかけてドル/ウォンも1,207.4まで上昇。結局前月末比16.7ウォン上昇した、1,205.5ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

2月のドル/ウォンは底堅い展開を予想する。1月は序盤に1,200の大口に乗せた後には、水準感からくる実需のウォン買いやウォン安のスピード調整から、ドル/ウォンは上値が抑えられたものの、世界的な株式市場の調整や地政学リスクの高まりもあり、ドル/ウォンの下値も固く、最終的にはドル/ウォンが1,200台に定着する月となった。

- 2月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。
- ①米FRBによる政策(利上げ速度)への検討 ②BOKによる金融正常化への道筋
 - ③ロシアとウクライナを巡る地政学リスク
- ①ここもとの米インフレ高進を受け、1月のFOMCでは3月利上げを示唆。さらにパウエルFRB議長は前回の利上げ局面より速いスピードでの利上げが可能であると示唆しており、市場が予想していた年4回の利上げよりも早い可能性すら出てきている状況だ。インフレ率は下落する兆しを見せない中、FEDがスタンスを変える可能性は低く、暫くはドル/ウォンの上昇要因となる。
- ②25bpの利上げが行われた1月BOK会合は、BOK総裁より更なる利上げも示唆する内容ではあったことから、ウォン買い材料とはなった。しかしながら、利上げペースはFEDより遅くなるが見込まれているほか、3月には大統領選、BOK総裁も交代するとあっては暫く金融政策の変更は見込めそうもない。よって、BOKによる政策がウォン買い材料として意識されることは少ないのではなからうか。
- ③ロシアとウクライナを巡る地政学リスクはリスクオフ材料として意識されることから、こちらもドル買い材料となる。

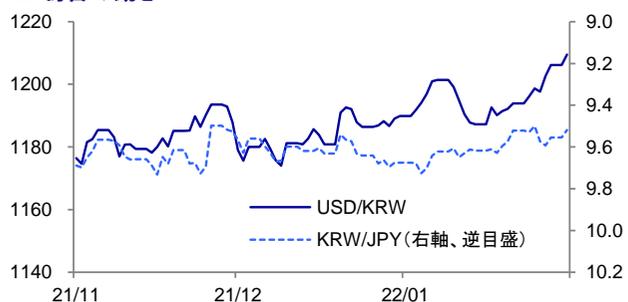
よって、2月は①、③の条件が意識されウォン安になりやすいだろう。しかし1,200を大きく越える水準では当局によるウォン買い介入も意識されることから、上昇速度はおさえられるのではなからうか。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の床屋・美容室事情』
 当地の床屋事情ですが、日本と同様に美容院と理髪店があります。日本と同様に美容院と理髪店で免許が異なり、一般的に若い人は美容院に行く傾向があります(理髪店の社長に聞いたところ、最近では理髪店の免許を取る人も少なくなり人気が無くなってきているとのこと)。今は厳しい状況の韓国の理髪店ですが、ただ通っているだけでは面白くない。ということで、思い出作りのためにソウル古いとされる理髪店(ソウル理髪店)に行くことにしました。ネットによると1927年に創業した同理髪店は、ソウル未来遺産にも登録されており、その古さから日本人観光客も訪れるソウルの観光スポットとなっております。ブログ等を見ると、90年の歴史にふさわしい建物で、中々行くのに勇気がいります。ソウル駅の裏側の小高い丘の上であり、アクセスがあまり良くないことからタクシーに連れて行ってもらうと、そこにはきれいな理髪店が一店舗。まさか買収されたのかと心配になって入ってみると御年80歳以上の社長が髪の毛を切っていました。日本人ですということ、コロナ前は日本人が髪を切りに日本から来てくれたと、その時取った写真を何枚も見せてくれました。どれもかっこよく仕上がっており、腕に間違いは無さそうです。さて髪の毛を切ってもらおうとしたところ、現金のみとのこと(韓国はカード社会なので現金は持ち歩かない)。仕方がないので社長に伺ったところ、クレジットカードがあればATMでキャッシングが出来ると教えてもらうことに。ATMには操作を教えてらう私と80歳以上の社長。遠くから見ると怪しい外国人が老人を騙しているようにしか見えないですね。。。何はともあれ、散髪は無事成功。コロナが明けたら皆さんもソウル古い理髪店にも来てください。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/1	輸出(前年比)	12月	23.9%	18.3%	31.9%
1/1	輸入(前年比)	12月	40.0%	37.4%	43.6%
1/1	貿易収支	12月	\$2.325M	-586M	\$3,001M
1/12	失業率	12月	3.2%	3.8%	3.1%
1/14	BOK政策金利		1.25%	1.25%	1.00%
1/25	GDP(前年比)	4Q	3.9%	4.1%	4.0%
1/26	消費者信頼感指数	2月	-	104.4	103.8
1/27	景況判断(製造業)	2月	-	90	92
1/27	景況判断(非製造業)	2月	-	82	78
1/28	鉱工業生産(前年比)	12月	1.8%	6.2%	6.3%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.55 ~ 27.85
TWD/JPY 4.07 ~ 4.20

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

1月のドル/台湾ドルは下に往って来いのレンジで推移。

月初の1/3は27.680でオープン。年初はオミクロン変異株への警戒感が和らぎ、世界的なリスクオンの流れとなり、台湾株についても上昇。台湾加権指数が昨年つけた過去最高値を更新すると、ドル台湾ドルは一時27.517まで下落したが、節目の27.500に近づくと調整が入り27.6台に戻した。その後は、12月のFOMC議事録の内容がタカ派であったことを受け、米金利が上昇すると米株が嫌気して下落、米国の早期利上げやバランシート縮小期待による米金利の上昇が世界的なリスクオフ要因となり、台湾株も下落すると台湾ドル売りが優勢となり、ドル台湾ドルは27.70付近まで上昇。

月央も引き続き、FEDの金融引き締めへの警戒モードが続くが、台湾株については半導体大手企業の業績への期待から底堅く推移。海外からの資金の流入も拡大する中、輸出企業のドル売りも入ると台湾ドル買いが優勢となり、27.55付近まで下落した。しかし、米10年債利回りが一時1.90%超える急上昇をすると台湾株も外国株と同様に下落、ドル台湾ドルは27.65付近にもどされた。

月後半に入っても台湾株の下落が続き、台湾加権指数が一時18,000ポイントを下回ると外国人投資家の台湾ドル売りが拡大し、一時27.75付近まで上昇。しかし、春節前の月末が近いこともあり、輸出企業のドル売り圧力も強く、上値は重かった。その後は、ウクライナ情勢の緊迫化やFOMC後のパウエルFRB議長の見会をきっかけに金融引き締めへの警戒感が高まる中、春節を前にポジション調整の動きも強まり、一時27.830まで上昇し、最終的には27.828でクローズした。

■ 今月の見通し

2月のドル/台湾ドルはレンジ相場を見込む。

2022年はオミクロン変異株への過度な警戒感が和らぎ、リスクオンの流れから始まり、台湾加権指数は最高値更新、ドル/台湾ドルは節目の27.500を試す展開となったものの、米国の金融引き締めへの警戒感からリスクオフモードになると、台湾株安、台湾ドル安の流れとなり、ドル/台湾ドルは往って来いとなった。

足許の台湾の経済状況は好調である。2021年のGDP速報値は+6.28%とコロナ禍が始まった2020年が+3.36%のプラス成長だったにもかかわらず、大幅な伸びとなった。2022年についてもさらに4%台の成長を予想するところが多い。主要因は民間消費の回復としているが、輸出についても引き続き堅調な推移が予想されている。従って、資源価格が上昇しているものの、台湾ドル高圧力となる貿易黒字は維持されよう。一方、台湾ドル安となる材料としては、台湾からの海外への投資であるが、米国の金融正常化への期待から米長期金利が上昇する中、利回りを求めた動きが拡大するであろう。

2月については、米金利動向、地政学リスクの高まりが警戒される中、月初から春節により休場となるため、春節明けの動向には注意したい。特に米金利の上昇は足許では株安要因となっており、台湾ドル安となりやすい。ただし、休日明けで輸出企業のドル売りが溜まることも想定され、結果的には売り買い交錯し、レンジでの推移となりやすいであろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の床屋・美容室事情』

日本と同じような美容室が当地でも浸透しており、日本語を話せる美容室を探せば、派遣の方でも特段困ることはありませんが、値段も日本と同じような水準になります。なお、観光ガイドで出てくる台湾式シャンプー(理容椅子に座ったまま髪を洗ってもらうのを呼称しているようです)の泡で髪をビーンと立てたり、髪の毛でいろんな形を作るのは観光用です。普通の美容院は日本と同じような洗髪スタイルになります。

一方、当地のスタイルの町の床屋も残っています。行ったことはないのですが、激安な代りに洗髪がなく、バリカンを主に髪を切る道具として使い、大抵、注文通りの髪形にはならず、みな同じような髪型になるそうです。

流行っている髪形というと韓流が意識されており、若い男の子はツーブロック風が多いです。一方の女の子で印象に残っているとすると、こちらも韓流の影響で前髪にヘアカーラーをつけて歩いている子を見かけます。ちなみに私も今まで通りに髪を切ってもらっているつもりでも、散髪直後にテレビ通話で日本人と話す時、台湾(韓流?)風味が入っているとされます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	外貨準備高	12月	-	548.41B	547.33B
1/6	CPI(前年比)	12月	2.70%	2.62%	2.85%
1/7	輸出(前年比)	12月	26.4%	23.4%	30.2%
1/7	輸入(前年比)	12月	31.9%	28.1%	33.8%
1/7	貿易収支	12月	5.75B	5.77B	5.71B
1/20	輸出受注(前年比)	12月	7.3%	12.1%	13.4%
1/22	失業率	12月	3.70%	3.72%	3.71%
1/24	鉱工業生産(前年比)	12月	9.50%	9.98%	11.37%
1/27	GDP速報値(前年比)	4Q	3.85%	4.88%	3.70%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8200
HKD/JPY 14.50 ~ 14.90

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【1月の香港ドル直物相場】

1月の香港ドル直物相場は、7.80台手前でもみ合う展開となった。米国連邦準備理事会(FRB)がインフレ抑制に舵を切り、今年中に利上げとバランスシートの縮小を進めるとみられている中で米金利が上昇したものの、堅調な香港の株式市場の値動きを背景に香港ドル直物相場は底堅かった。一方で先物相場については、先々の米ドル香港ドル間の金利差が広がったことで、スワップポイントのディスカウント幅が拡大した。株式市場においては、今年に入ってからIPO関連の資金フローは限定的となったものの、ストックコネク(中国本土市場との株式相互取引制度)を通じた香港株式市場への資金流入額は流入超となった。マクロ経済に目を向けると、労働市場は引き続き改善しており、12月の失業率は3.9%と、4%を切る水準まで低下している。しかしながら、1月に入り新型コロナウイルスのオミクロン株が香港域内でも流行し、政府は感染拡大防止に向けた規制措置を強化し、中国本土との往来再開も遅らせた。

【1月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORの1か月物は、年末越えの季節要因が剥落したことから一時的に低下していたものの、米ドルベッグ制の下、FRBが一段のタカ派色を強めたことから再度上昇した。3か月物についても、今年3月にFRBが利上げを実施すると観測が高まっていることを受け、1年ぶりの高値である0.32%まで上昇した。また、HKMAは為替基金証券(EFBNs)の増発を通じた香港ドル流動性の吸収を継続しており、HKMAのアグリゲートバランスは3,575億香港ドルまで減少している。香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差は、1か月物・3か月共に前月と同じ水準まで戻している。一方で、依然潤沢な香港ドル流動性の状況を受けて、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップレート)は-110bpsを下回る水準までマイナス幅が拡大している。

■ 今月の見通し

【2月の香港ドル直物相場】

2月の香港ドル直物相場は、7.78から7.82レンジ内で推移すると予想している。FRBによる正常化サイクルが早まるほど、米ドルと香港ドルの市中流動性状況の差が拡大する為、キャリートレードの活発化を通して香港ドルの下押し材料となる可能性が高い。FRBによる過去の利上げ局面を振り返ると、2017年に25bpsの利上げが3回実施され、バランスシートの縮小が開始された際には、香港ドルの直物相場は取引バンドの中心値である7.80を超える水準まで下落した。これまで以上に強いインフレ圧力が続いている米国の状況を鑑みれば、今回のFRBの引き締めペースは今まで以上に速いものになると見られており、今年の香港ドル直物相場は下落方向への圧力に晒されるだろう。一方で、今年に入ってからハンセン株式指数が他の株式市場に比べて堅調に推移しており、今後も米国による規制強化や制裁を回避する為、中資系企業によるIPOの増加も想定される。株式市場への資金流入が短期的には香港ドルのサポート要因となる可能性はあるだろう。急激な下落は想定しにくいものの、年後半にかけて、緩やかに下落していく展開を想定している。

【2月の香港ドル金利市場】

HKMAによるEFBNsの増発により、2月のアグリゲートバランスは3,375億香港ドルまで減少すると見られているものの、香港ドルの流動性状況は引き続き潤沢な状況が続くだろう。加えて、利上げサイクルについても香港は米国に対し遅れを取ると考えている。しかし、FRBの利上げに伴い米ドルの短期金利が上昇することで米ドル高圧力が強まり、香港ドルがベッグ制の下限である7.85まで下落していく展開となれば、香港ドルの流動性が低下する為、香港ドル短期金利が上昇する可能性がある。中長期金利については、市場参加者がFRBの更なるタカ派傾斜を想定している為、米ドルベッグ制の下では香港ドルのスワップ金利も連動して上昇していく展開が想定される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『香港の床屋・美容室事情』

香港の床屋・美容室は種類が豊富で、価格帯も幅広い。個人的にお勧めなのは、地下鉄の駅やショッピングモール等、比較的目に付くところに増えてきたスピード重視の床屋です。仕上がりは標準的ですが、気軽に入れる上に、手早くカットしてくれます。ヘアスタイルにこだわりのある方は、専門のスタイリストのいる比較的高級なヘアサロンに行かれる方が良いでしょう。最近では店内の雰囲気が高級で洗練されている男性向けのヘアサロンが香港でも増えてきており、ヘアカット以外にも多くのサービスを受けることができます。

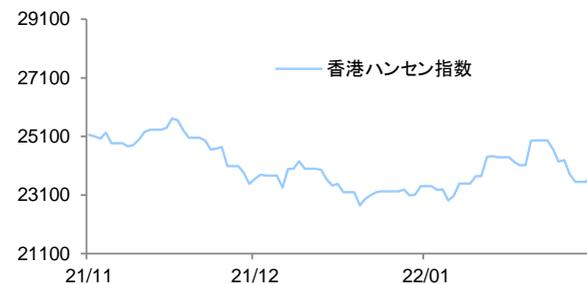
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/3	小売売上高(価額、前年比)	11月	9.7%	7.1%	12.1%
1/3	日経香港PMI	12月	-	50.8	52.6
1/7	外貨準備高	12月	-	\$496.8b	\$499.4b
1/18	失業率(季調済)	12月	4.1%	3.9%	4.1%
1/20	CPIコンボジット(前年比)	12月	2.5%	2.4%	1.8%
1/27	輸出(前年比)	12月	16.3%	24.8%	25.0%
1/27	輸入(前年比)	12月	11.8%	19.3%	20.0%
1/28	貿易収支(HKD)	12月	-\$27.0b	-\$32.8b	-\$11.6b
1/28	GDP(前年比)	4Q A	5.0%	4.8%	5.5%
1/28	GDP(季調済/前期比)	4Q A	1.0%	0.2%	0.1%

中国人民元相場

予想レンジ:

USD/CNY	6.3000	～	6.5000
CNY/JPY	17.38	～	18.58
100JPY/CNY	5.3800	～	5.7500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

1月のドル人民元(USDCNY)は2018年以来の元高水準推移後、月末のFOMCを受けて反発。

4日、6.37台で取引を開始。5日米国時間に公表された12月FOMCの議事要旨がタカ派な内容だったことで利上げ期待が高まり米金利上昇からドル高が加速し、USDCNYも6日には6.38台前半まで上昇。

10日のUSDCNYは6.37台半ばで取引を開始、週前半は6.37台で動意に乏しく推移。米国の金融政策を巡り米長期金利が一時1.8%台まで上昇するも、12日に発表された米CPIが予想の範囲内であったことから米金利は反転低下。週後半にかけてはドル売りが優勢となりUSDCNYも小幅に下落して推移した。13日には二週間振りに6.35台半ばまで、14日には一時6.34台前半へ下落。

17日のUSDCNYは6.35台半ばで取引を開始。同日、PBOCはMLFの満期到来分について増額ロールの上、適用金利の10bp引き下げを実施。また、第4四半期GDPや主要経済指標等が発表されるも落ち着いた相場展開となり、一時6.33台後半まで軟化を見せた。20日には、1年物及び5年物LPR低下が発表されたが、既に織込み済みで為替市場は無風で通過。21日の夜間取引では人民元高が更に進み、6.33台を示現。

24日のUSDCNYは6.33台半ばで取引を開始。週前半は春節を控え取引が低調な中、年初から続く人民元高の流れが継続、26日には2018年4月以来の6.3200をつける。26日のクローズ後に開催されたFOMCのタカ派な内容に、米金利が上昇しドル買いが加速。USDCNYも反発し27日には二週間ぶりとなる6.36台後半へ上昇。

■ 今月の見通し

USDCNYは緩やかな人民元安を予想する。

・米中金融政策の乖離拡大：米国では3月利上げ開始、2022年4回以上の利上げがコンセンサスになりつつある。物価上昇を背景に着実に金融正常化への道筋が示されておりドル高要因となっている。一方、中国では中央経済工作会議で2022年は経済安定が主要目標として掲げられていることから、PBOCの緩和バイアスは継続すると予想する。米中金融政策の違いがドル高元安をサポートする流れをメインシナリオと考える。

・貿易動向：一方で、中国の貿易黒字は足元の人民元高の一要因。輸出が順調に増加している中で企業の外貨預金金額は高止まりしており、人民元買いのフローは引き続き元高要因となると考える。オミクロン株の拡大によって、当初の想定よりは後ろ倒しになる可能性があるものの、2022年以降、製造業の生産拠点がコロナ前の状態に戻れば、サプライチェーンが東南アジアに移ることとなるため、貿易収支縮小が相対的な人民元安誘発につながると想定。

・年初より金利上昇に伴うドルの強さがみられる中でも人民元は上昇した。実需を中心とした人民元の買い圧力は引き続きみられることから、当初の想定よりも元安ペースは緩やかになると考える。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の床屋・美容室事情』

「床屋」の語源は諸説ありますが日本で広まった言い方で、中国語では「理髪店」「美容院」という言葉が使われています。

地元の方が通う理髪店ではカットをして、シャンプーをして、お店によってはサービスで髭剃りをしてくれる、という内容で日本とあまり変わらない印象です。

しかし、驚いたのはその値段の安さ。上海だと30元程度でカットができるそう。

安い！！と目を丸くしていると、他の都市ではこの半額で切れるらしく、さらに郊外に行くと10円で切れるお店もあるとのこと。

また、日本では少し前に「1000円カット」が流行りましたが、上海市内の中心地でも、ささっと髪を切って、シャンプーではなくバキュームで髪の毛を吸い上げる「20円カット」の理髪店があるそう。上海中心地では安い価格設定です。

美容院でも上海の安いところによっては60円でカットができます。もちろん、高い美容院は100元を超え、数百元するお店もありと美容院のタイプは様々ですが、こちらも日本と比べると少し安い印象です。評価サイトで簡単にお店の概要や口コミ、値段を検索し、予約することができます。サイトで検索していると「原宿salon」という美容院を発見。おしゃれな内装に強気な値段設定と、日本の人気を感じました。

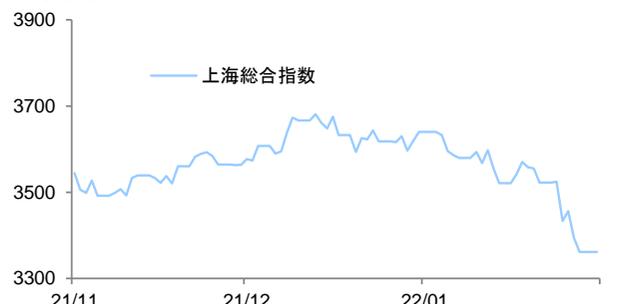
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	財新・製造業PMI	12月	50.0	50.9	49.9
1/12	CPI(前年比)	12月	1.7%	1.5%	2.3%
1/12	PPI(前年比)	12月	11.3%	10.3%	12.9%
1/12	マネーサプライM2(前年比)	12月	8.6%	9.0%	8.5%
1/14	貿易収支	12月	\$73.95b	\$94.46b	\$71.75b
1/17	GDP(前年比)	4Q	8.0%	8.1%	9.8%
1/17	小売売上高(前年比)	12月	3.8%	1.7%	3.9%
1/17	鉱工業生産(前年比)	12月	3.7%	4.3%	3.8%
1/20	1年物LPR	-	3.70%	3.70%	3.80%
1/20	5年物LPR	-	4.55%	4.60%	4.65%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3450 ~ 1.3650
SGD/JPY 84.00 ~ 87.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年01月のシンガポールドル(SGD)相場はSGD安が進行。

第一週のSGDは軟調に推移。米国の早期利上げ観測を背景とする米金利上昇が嫌気された。5日発表のFOMC議事要旨では早期利上げやバランスシート縮小時期の前倒しについて可能性が示唆され、米金利の上昇が継続。アジア通貨への重しとなり、SGDも続落。月初1.34台後半で推移していたSGDは、7日にかけて1.36台半ばの水準までSGD安が進行。

しかしその後、USDはポジション調整と見られる売りに押され軟調推移。USD/SGDも一転してSGD高方向に推移する展開。米12月CPIの結果も市場予想の範疇に留まり、米金利は低下。米株の反発とUSD安が続く中、USD/SGDは1.34台前半の水準までSGD高が進行。

その後のUSD/SGDは狭いレンジ内推移が継続。FOMC議事要旨・米主要経済指標の発表を終え目新しい材料に欠けるなか、月半ばのアジア通貨はまちまちの状況となった。25日、MASは緊急会合を行い、NEERバンドの傾斜をSGD高方向へと調整を行った。シンガポール内のインフレ率が高止まりしていることを踏まえての措置であったと見られている。通常4月と10月に開催されるMASによる政策変更がこのタイミングで行われたことはサプライズであり、SGDは小幅に上昇。USD/SGDは月中安値を更新した。

そして26日、注目のFOMCにおいては会見にてパウエルFRB議長が正常化ペースについての明言を避けたことを受けて、市場はタカ派警戒感を強め、USD高が進む展開となった。SGDは一転軟調推移となり、月末にかけて下落して推移。USD/SGD現在、1.35台半ばの水準にて推移している(28日現在)。

■ 今月の見通し

2022年02月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安の進行を予想。

MASは1月、サプライズとなる金融引き締めを行ったが、市場の注目は引き続き米FRBの動向であり、FOMCにてタカ派スタンスの陰りが見えず月末にかけて米金利が上昇するなか、前日にMASが先んじてSGD高方向への政策転換を行ったにも関わらず、SGDは軟調推移のまま月末の取引を終えた。

米国のみならず、シンガポールにおいてもインフレ率の高騰が目立つ。特に交通関連指標が高騰を牽引しており、ガソリン価格上昇の影響を受けやすい同国の指標特性上、インフレが高止まりする状況は暫く続くであろう。次回会合は4月に予定されているが、更なるNEER政策の変更(SGD高方向への調整)が行われる可能性は高い。

MASはNEERについてその①傾き、②中央値、③上限下限幅、のいずれかについて調整を実施するが、そもそも打ち手に乏しく、基本的には①を変更するのみに留まるのが通例。②の引き下げ・引き上げはそれ即ち通貨の切り上げ・切り下げに直結することから、MASにとっては強力かつ最終的なカードとなる趣もあり、現状インフレ率が高止まりしてはいるが至急対策をせねばならないという状況にはないことから、次回会合にてその貴重なカードを切ってくるとは考えづらい。次回会合は4月に行われるものの、政策の変更が行われるにしても1月と同様に①のNEERの傾きの調整する程度の変更に留まろう。

となれば、1月に既に起こっている状況のように、市場の注目は引続き米FRBの利上げ動向であり、実際に米国が利上げが見込まれ米金利上昇が続く状況下において、基本的にSGDはUSDに対し軟調となる展開を予想する。

なお、NEERバンドの構成上、USDに並び高い比率を占めるとされる人民元の動向も重要だが、堅調な経常収支・緩和的な当局のスタンスを鑑みれば、人民元は安定推移を継続しよう。USD/SGDにおいてはSGD安の進行を予想するものの、NEER内のSGD推移は比較的安定した動きになると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

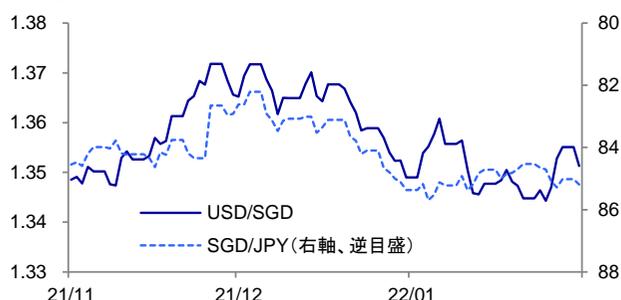
『当地の床屋・美容室事情』
担当月なので執筆致しますものの、正直、私はこのお題に対し回答するに相応しくない担当かもしれません。せっかく海外にいるにも関わらず、私は同い年の日本人男性が経営する床屋にずっと通い続けており、あまり当地独自の床屋・美容室事情に詳しくありません。が、一店集中の結果、それなりに得られる情報や見える景色もございました。

昨今、海外労働者に対するビザが降りづらくなっている当地において、日本人の理髪技術が高く評価されているためか、彼の経営する床屋のスタッフは皆ビザの更新に滞りなく成功しており、予約も1ヶ月ほど取れなかつたりします。3席のみの小さい店とはいえ、1日で5~6回転は出来るでしょうから、ここまで予約が取れないのは驚異的。顔剃り含め、きめ細やかなサービスが好評のようで、人種を問わず様々なお客様が来ているところからも、高い評価を得ていることが分かります。一方ローカルの床屋さんは、外からサービス内容を見ただけですが、オプショナルとなるサービスが乏しい様子。確かに当地の場合、一定の年齢まで男性は定期的な兵役に備えるべく清潔感のある髪型を維持せねばならず、独自性も求められていませんから、日本の理髪店のような+αのサービスは不要なのでしょう。ここ数年、私の通わせて頂いているお店の人気は変わらず。いや、これだけ駐在員の純減が続いている当地の状況にも関わらず満席の状態が続いているのですから、如何に需要が高いということか。オーナー含め、従業員の方々の体調が心配だったりします。

あまりお題に対する回答になっていないかもしれませんが、以上となります。今月も宜しく願ひ致します。
(アジア・オセアニア資金部 成田)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/3	GDP	4Q	5.1%	5.9%	7.1%
1/4	購買部景気指数	12月	-	50.7	50.6
1/5	小売売上高(前年比)	11月	0.7%	1.9%	7.5%
1/17	非石油地場輸出(前年比)	12月	12.9%	18.4%	24.2%
1/24	CPI(前年比)	12月	3.7%	4.0%	3.8%
1/25	MAS 緊急調整				
1/26	鉱工業生産(前年比)	12月	12.0%	15.6%	14.1%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.90 ~ 33.70
THB/JPY 3.41 ~ 3.48

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

上旬4日、ドルバーツは33.30近辺で2022年の取引を開始。米早期利上げ観測や米金利の上昇により他のアジア通貨が軟調となるも、バーツは他通貨と逆行して対ドルで堅調。翌5日はFOMC議事録発表を前に33.10台まで下落したが、同議事要旨にて早期利上げに加えてQTも議論されていたことが判明し、ドル高に転じる。6・7日はFOMC議事要旨の内容を受けたドル買いが継続したほか、オミクロン株によるタイ国内新規感染者数が急増したために一時33.70超え。週明け10日、懸念されていたロックダウンをタイ政府が検討していないことが報じられ、バーツ売りが落ち着きを見せた。

中旬、パウエルFRB議長2期目の公聴会を控えてドル売りが強まる流れに短期的なストップを巻き込みながら下落し、公聴会を波乱なく通過すると、33.30割れ。12日は米CPIに対する警戒感に加えて、ドルバーツは今週に入り急速に値を下げていたことから日中に33.40台まで反発するも、米CPIは市場予想通りであったことからイベント消化を受けて33.30近辺まで下落。13・14日と一旦イベントをこなしたために方向感に欠ける展開で33.20台を中心に推移。17日は米国休場だったが、上値トライ後は特段材料無い中で33.10近辺まで下落。18～20日はブラックアウト期間に入り、且つ目ぼしい経済指標等もなかったが、20日に外国人の隔離無し受入れ措置の再開方針が決定されて下値を探る動きが目立ち、32.90台で引けた。

下旬、21日は翌週に控えたFOMCとこれまで進んできたバーツ高の反動から下げ幅を縮小。週明け24・25日および26日FOMC前までは33バーツを挟んで方向感に欠ける展開が継続。FOMC後の会見では、3月利上げがほぼ確実と印象付けられ、加えて四半期毎ではなく毎会合での利上げを示唆するような発言、25bpを超える幅での利上げを否定しない等想定よりもタカ派色が強い内容。これを受けて新興国通貨は対ドルで下落し、ドルバーツはこれまでの下げ幅を埋めに行くようにバーツ安が進み、月末にかけ33バーツ半ば近辺まで上伸。

■ 今月の見通し

2月のドルバーツ相場は底堅い展開を予想する。まず、タイ国内に注目すると、底堅い動きと予想していることは対照的に、基本的にはバーツにとってサポート的な材料が多いと考える。オミクロン株の拡大に伴って一時は無期限停止となった外国人観光客の隔離無し受入措置Test&Goが再び2月1日より再開されるほか、新規感染者数もピーク時2～3万人超/日とタイ保健省が予想していた水準からは公表値ベースで下に大きく乖離している。また、デルタ株の感染拡大で落ち込んだタイの経常収支は、昨年8月を底に徐々に回復しつつある等の要素がバーツをサポートすると考える。実際、1月中旬に33バーツを一時的にでも割り込んだのは、そういった影響があったという証左ではないだろうか。

しかし、外部環境を含めて考えると、1月FOMCのインパクトがそれらのバーツ買い要因を上回ってドル買いを強めると考える。これまで年4回程度と見られていた米利上げが金融機関によっては6回との見方や、3月FOMCにて50bp利上げを行うとの見方もあり、予想の上方修正が目立つ。しかも、こうした局面では金利と逆相関の関係にあると考えられる株価(米株主要3指数)は下落しているものの、警戒されるべき水準まで下落しているとはFOMC直後の反応からは考えにくい。そのため、金利が上昇あるいは引き続き高い水準をキープしても、株価が崩れなければ、それは投資家がドル買いを進める理由にもなりうるのではないだろうか。そのため、着実にかつ昨年考えられていたよりも早いペースで米利上げが進みそうな現状、新興国通貨にとっては資本流出圧力の高まりによる自国通貨安圧力に晒されやすい月となるのではないかと考える。

■ 今月のつづき(現地からの声)

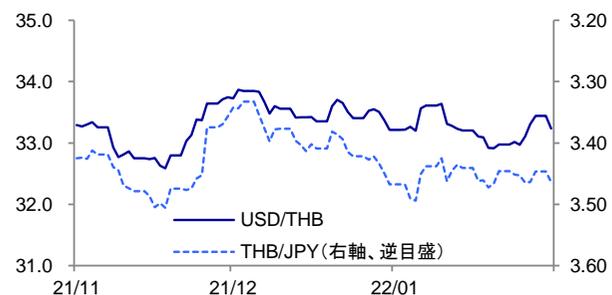
『当地の床屋・美容室事情』

当地の床屋・美容室について、コスト面で見ると非常に幅が広がります。日系美容室との比較しか出来ませんが、ローカル美容室(床屋)であればもちろん高級なところもあります。バンコクですら200バーツ程度でカットできるお店もあります。これは値段相応な外見で、良く言えばコロナ禍ではオープンエアでgoodです。こういったお店の前を通ったことはありますが、さすがにチャレンジ出来ませんでした。

日系美容室について、バンコクは在留邦人が多いために店舗数も多く、使用している機材やシャンプー等は日本のそれと同じものを使っているところもあり、対応して下さるスタッフさんがタイの方であることを除けば、日本で切るとほぼ変わりません。その分、海外で日本と同じようなサービスを受けるということで平均的なローカルと比較すると値段が高く、普通のカットでも約6～7倍の価格差です。そこに主に女性向けメニューであるトリートメントなら何やらを加えると、30倍程度まで価格差が拡大します。それほどまでローカルと比べて値段差がある日系美容室ですが、おしゃべりに敏感なタイ人女性からは日系美容室のサービスが支持されているようで、毎月トリートメントで来店するお客さんもいると、スタッフさんに教えてもらったことがあります。サロントリートメントが不要な私はどこでも同じなのかもしれませんが、上手く希望が伝わらなかったらと思うと、日系美容室通いから抜け出せなさそうです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	CPI YoY	12月	2.51%	2.17%	2.71%
1/13	消費者信頼感指数	12月	-	46.2	44.9
1/21	輸出(通関ベース)	12月	16.40%	24.20%	24.73%
1/21	輸入(通関ベース)	12月	18.15%	33.40%	20.47%
1/21	経常収支(通関ベース)	12月	\$745M	-\$354M	\$1,019M
1/24	自動車販売台数	12月	-	86,145	71,716

マレーシアリング相場

予想レンジ:

USD/MYR	4.145	~	4.235
MYR/JPY	26.74	~	27.47
JPY/MYR	3.64	~	3.74

マレーシアみずほ銀行 内田 墨

■ 先月の為替相場

先月のリングット相場は年初のドル金利上昇や、27日米FOMCを受けたドル金利急騰をきっかけとした新興国通貨売りで一時的なリングット売りとなったが、下げは続かず月全体で見ると下げ幅は限定的。やや方向感に欠ける展開となった。

22年は年明け早々からリングット相場は軟調な展開。4.16でスタートしたUSD/MYRは僅か一週間で4.21後半まで上昇するやや値の荒い動き、6日に発表された12月FOMC議事要旨では、テーパリング終了後の3月早期利上げに前向きな内容だったことに加え、委員会メンバーが金融引き締めまで議論していたことが伝わると米金利は急騰。新興国通貨売りが加速し、リングも下げ幅を拡大させた。

中旬にかけては米国市場など外部要因に振られる展開。11日の米指名承認公聴会でのパウエル議長発言や12日の米CPI発表を受けてドル下落が加速。パウエル議長は“バランスシートは必要以上に膨らんでいる”などと全体的にタカ派な発言。CPIも結果こそ前年比+7.0%と約40年ぶりの高水準だったものの、予想範囲内だったことは安心感を与えた。また、国内では10日に11月鉱工業生産が市場予想を上回った他、11月失業率は4.3%と前月と同水準ながら、未就業者数が20年4月以来初めて70万人を下回り、国内経済の回復を裏付ける内容。上旬にかけて大きく売り込まれたリングットは下げ幅を縮小させた。

下旬にかけては27日の米FOMC発表を控え神経質な値動き。世界的なインフレ高進懸念で米2年債利回りが20年2月以来の1%を突破すると、株式市場ではハイテク株の大幅調整を受けてリスク回避のドル買いとなった。注目されたFOMCでは、3月、5月の2会合連続利上げも排除しないタカ派な姿勢と捉えられ、ドル金利は更に一段上昇。USD/MYRは一時4.20を超える水準までMYR売りとなったが、4.20を超える水準では戻り売りも入り、4.18半ばでクローズとなった。

■ 今月の見通し

今月のリングット相場は、3/3に馬中銀政策金利、3/17に米FOMCが控える中、グローバルな金利動向に左右されそうだ。

先月20日にマレーシア中銀が発表した政策金利は9会合連続で据え置きとなる1.75%。同時に発表されたステートメントでは、ヘッドラインのインフレ見通しこそ前回から変更なかったものの、経済正常化に伴うコアインフレ上昇について触れ、次回以降の利上げに向けた準備を着実に進めていることが確認される内容。市場では年内2回の利上げが見込まれており、マレーシアでも利上げ時期に注目が集まる。米国市場では先月FOMC後には3月25bpの利上げ含む年5回利上げを織り込む水準となっている。今月の市場動向次第で3月50bp利上げや更なる利上げ回数増加を織り込むマーケットとなれば、新興国通貨の一段売りが懸念される。現状利上げを急ぐ姿勢を示していない馬中銀だが、先月25日にシンガポールが急遽金融引締め策を発表する等の動きも見せていることから、3/3の政策金利発表への注目度が上がる。

国内動向に目を向けると、感染動向は懸念されているオミクロン株は新規感染者数のじり高傾向は見られるものの、感染急拡大までには至っていない。現時点では政府主導によるブースター接種の推進が奏功していると評価される。また、今月5日には、5-11歳の子供向けワクチン接種開始も予定されていることから、旧正月連休による感染急拡大やそれに伴う医療機関の逼迫が回避できれば、感染悪化による経済への悪影響を材料としたMYR売りは限定的となりそうだ。

以上を踏まえると、今月のリングット相場は、上旬は旧正月で市場参加者が少ない中、薄商いのマーケットで大きな値動きとならなければ、中下旬にかけては引き続き外部環境次第ではあるものの、3月の中銀政策金利発表を控えて全体的には動きづら展開となる。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

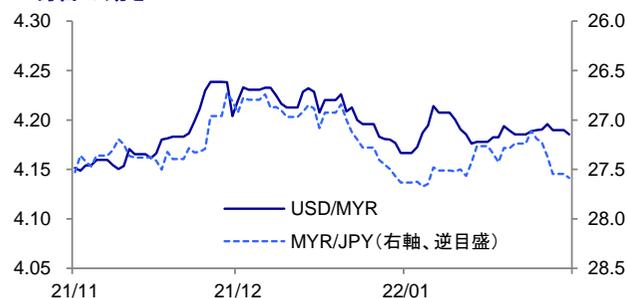
『当地の床屋・美容室事情』
マレーシアでも日本で言う所の所謂“千円カット”が普及しており、ショッピングモールなどの複合施設に行くたびに必ずと言って良い程ローカライズされたショップが入っています。ただし利用客の大半は男性であり、マレー系男性を中心に人気があります。

イスラム教の国マレーシアでは、特にイスラム女性は髪や肌を人目に晒さないことから、床屋でもその対策が必要になります。イスラム女性御用達のヘアサロンでは、カーテンで仕切られ、勿論女性スタイリストがしっかり対応します。常夏の国でヒジャブ(スカーフ)を付けていると、首からは言わば蒸し風呂状態。カットに入るまでには下準備が必要とのことですが、カーテンで隠されると向こう側の様子がどうしても気になります。

今でこそ営業しているヘアサロンですが、コロナ禍でロックダウン中は閉店を余儀なくされていました。営業できないお店も勿論大変ですが、ヘアサロンの場合、ロックダウン中でも髪の毛は容赦なく伸びますので、お客さんにとっても死活問題です。ロックダウン中はどのように対処していたか当課スタッフに聞き取り調査をした所、一人で切る、友人に切ってもらい、切らずに伸ばすなど、色々な方法で難局を乗り切っていました。正直な所、一人で切るのは無理だろうと思っていた一方で、激しい虎刈りになってた記憶もなく、Aさんは彼女に切ってもらったのだと勝手に判断することになりました。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/7	Foreign Reserve	Dec31	-	\$116.9b	\$116.3b
1/20	BNM Overnight Policy Rate	-	1.75%	1.75%	1.75%
1/21	CPI YOY	Dec	3.1%	3.2%	3.3%
1/24	Foreign Reserve	Jan 14	-	\$116.2b	\$116.9b
1/28	Exports	Dec	24.4%	29.2%	32.4%
1/28	Imports	Dec	27.8%	23.6%	38.0%
1/28	Trade Balance	Dec	21.90B	30.99B	18.90B

インドネシアルピア相場

予想レンジ: USD/IDR 14300 ~ 14700
 IDR/JPY 0.79 ~ 0.82
 JPY/IDR 121.95 ~ 126.58

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

1月のドルルピアは、ルピアが上値重く推移した。年初の取引となった3日、14200台後半でスタートしたドルルピアは、米利上げが加速する可能性が高まる中で、ドル高が進み、ルピア安が進行した。特に、5日に発表された12月分の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨で「ほとんどの参加者が労働市場の改善が継続すれば、早期利上げが可能と予想」等、早期利上げの可能性を意識せざるを得ない内容があったことから、6日のドルルピアは一時14400台までルピア安が進行した。7日以降は、米12月雇用統計の発表を挟んでドル高は一服し、材料難の中、14300を挟んで小動きが続いた。

月後半に入り、17日以降、再び、米利上げが意識される中、米金利が上昇したことを背景に、ドルルピアも再びドル高ルピア安地合いに。19日にかけて14400手前までルピアは下落したが、米金利も反落する中で、ルピアも下げ止まった。迎えた翌20日、インドネシア中銀政策決定会合では主要政策金利である7日物リバースレボ金利は3.50%で現状維持が決定されるも、市中銀行に課す預金準備率について、今後段階的に引き上げていくことを発表した。ペリー総裁は会合後の会見で流動性について極めて潤沢と指摘し、預金準備率引き上げ後も、流動性は十分に残されると指摘した。また、米金融政策についても具体的な言及が目立ち、3月に利上げを開始し、年4回の利上げを実施すると想定していると述べるなど、米金融政策動向への警戒感の高さを伺わせ、今後のインドネシア中銀による利上げへの地ならしを感じさせる内容となったが、今回は、主要政策は据え置きと市場予想通りであったことや翌週のFOMCを控え、ルピアへの影響は限定的となり、14300台を中心とした動きが続いた。迎えた26日、FOMCでは想定通り3月の利上げ開始が規定路線となり、バランスシート圧縮にも早期に乗り出す方針が示され、タカ派姿勢を崩さなかったことで、再びドル高地合いに。27日には14400水準までルピア安が再び進み、月末のドル買いフローも相まって、31日には一時14400台前半の月中ルピア最安値水準までルピアは下落した(31日 日中時点)。

■ 今月の見通し

2月のドルルピアは、ルピア安を警戒したい。ルピアの買い需要が強いことを端的に示しているのは、貿易収支の大幅な黒字、それに伴う、経常黒字であると先月の当欄で述べた。しかし、21年12月分の貿易収支は10億ドルの黒字に留まり、市場予想の31億ドルを大幅に下回った。内需の回復で、輸入が過去最高額にまで膨れ上がったことで、貿易黒字額が大幅に減少した。石炭価格をはじめ、コモディティ価格は引き続き堅調に推移している。しかし、今年1月はインドネシア政府が一時的に石炭の輸出を禁止した。これは輸出額を抑えることにつながる規制である為、単月の貿易収支が更に黒字を減少させる、または赤字化する可能性もある。すでに石炭禁輸措置は撤回されており、影響の長期化は避けられた格好だが、こうした規制が今後も飛び出すことも不安材料の一つ。原油価格の上昇も相まって、これまでのルピアの買い需要を支えてきた貿易収支にかげりが見えることに留意が必要だろう。

加えて、米政策金利の利上げが迫っていることもルピアを不安定にする要因だ。すでに3月の利上げ開始と少なくとも年内4回の利上げは確実とされる中で、5回の利上げや、一回の利上げ幅が0.5%になる可能性も指摘されている。米長期金利もまだ上昇余地はあると考えられ、インドネシア10年物国債を中心に、海外投資家による資金逃避が進む可能性を孕む。1月27日時点で889兆ルピアの残高があり、売り余力が無いわけではない。年後半に向けた米金利の上昇にも警戒を怠れない。

また、26日に国際通貨基金(IMF)が公表した報告書で、インドネシア中銀による国債の直接引き受けに釘を刺したことや、オミクロン株が中心と思われるインドネシアにおけるコロナウィルスの感染再拡大がルピアの重石となる可能性もある。

これまで、比較的安定した推移となっていたドルルピアだが、ここにきて懸念材料が目立つようになった。14500はもはや射程圏内であり、今月はルピア安を警戒すべきだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

「当地の床屋・美容室事情」
 インドネシアでは2か所の美容室・床屋を経験。

1: ホテルの中に入っている美容室

謎のインドネシアンチャイニーズおばちゃん一人でやっている美容室。まったく情報なく突撃してみたところ、おばちゃんが英語喋れた為、2年ほど愛用。バリカンを多用してくる。おばちゃんがしゃべりすぎて、シャンプーもなく切るだけなのにいつも1時間以上かかる。腕を前後に振るだけという謎の健康法を常に勧められる。若干スピリチュアルなおばちゃん。値段は150,000だったが、途中から180,000ルピアに値上げ。

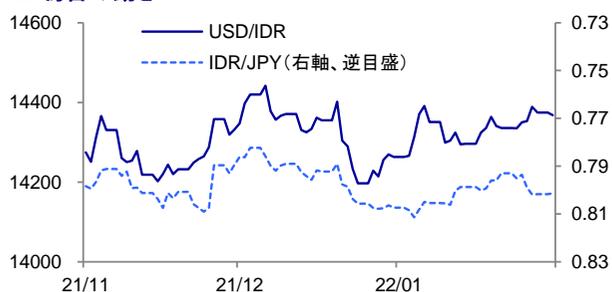
窓が開けばなしで、常に蚊との戦いを強いられる。Gが店内を歩いていることが多く、切っている途中でこっちに来るなど祈る。コロナが始まってからホテルの空調がストップしたため、大変暑くなってしまい、お互い汗だくでのカットに。さすがに汗だくでGと蚊と戦うのはつらく、泣く泣く別の店を探すことに。

2: ショッピングモール内の床屋

日本でいう1000円カット(IDR150,000)。人気店で、常に30分くらい待たされる。シャンプーなく、チクチクするが、早くて技術も安定している。切ってくれるのはだいたい若いお兄ちゃん。特に面白いことはない。(みずほコンサルティングインドネシア 小澤)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/3	CPI(前年同月比)	12月	1.81%	1.87%	1.75%
1/17	貿易収支(USD M)	12月	3129	1020	3510
1/17	輸出(前年比)	12月	40.70%	35.30%	49.70%
1/17	輸入(前年比)	12月	39.40%	47.93%	52.62%
1/20	BI 7daysリバースレボ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.90 ~ 52.00
JPY/PHP 2.20 ~ 2.30

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

新型コロナウイルス感染者数の急増を受けた外出移動制限の厳格化がペソ下押し材料となり、年末からのペソ安の流れ継続となり節目の1米ドル=51.000ペソを超えてペソ安が進行。5日発表の12月のフィリピンの消費者物価指数は3.6%と前月の4.2%から低下したことを受けて、ペソは大幅反発する局面も見られたが、米雇用統計の内容が3月の利上げを後押しする内容となったことを受けて、ドルが堅調となったほか、フィリピンの1日当たりの新型コロナ新規感染者数が連日過去最多を更新したことが嫌気され、上旬にかけて約2年ぶりとなる水準までペソ安が進行。

フィリピン中央銀行総裁は今年上期に利上げを実施する可能性は低いとの認識を示した一方で潤沢な外貨準備が世界的な金融引き締めの影響をある程度和らげていると述べたことから月の半ばにかけてはペソ高となるも、1米ドル=51.000ペソ付近では上値の重さを見せ、米国の引き締めが予想外に加速するとの思惑や供給逼迫懸念からWTI原油先物が、2014年10月以来の高値まで上昇したことが嫌気され、ペソは下落に転じ、直近安値を更新し19日には1米ドル=51.500ペソまでペソ安が進んだ。

その後は新型コロナウイルス新規感染者数が減少に転じたほか、フィリピン中銀総裁のペソの安定は送金や直接投資に支えられているとのコメントにサポートされ、ペソは底堅さを見せたが、FOMC後のパウエル議長の記者会見内容が想定していたよりもタカ派となったことからドル全面高となり、再度、1米ドル=51.500ペソ付近までペソ安が進む展開となり、ペソは月を通して上値の重い展開となった。

■ 今月の見通し

1月に入りフィリピンにおいて新型コロナウイルスの感染者が急増し、1日あたりの新規感染者が過去最多を更新し、マニラ首都圏の外出移動制限が1段階厳格化されるなど、経済活動の低迷や景況感悪化がペソの下押し要因となっている。足許は新規感染者が減少に転じる兆しを見せているが、今後、感染が再度拡大する懸念は残り、更なる厳格化のリスクはペソ下押し要因として燻る。

FOMC後の記者会見において、パウエル議長は4回が利上げペースの上限ではないこと、1回あたり50bpsの利上げもあり得え、前回の利上げ局面よりも利上げペースが早くなる可能性を示唆し、予想よりもタカ派な内容となったことから中期的な金融環境タイトニング方向は変わらずとの見方。正常化に向かう米国とインフレ上振れリスクが意識されるも経済の安定的回復を最優先とし、当面は現行の緩和的スタンスを継続するフィリピンとの金融政策の方向性の違いから、引き続き、中長期的にはドル高ペソ安バイアスが掛かりやすい地合いを見込む。

また、FOMC後に米株値は下落したが、タカ派な記者会見内容にしては下げ幅は限定的となった。しかしながら、3月以降のFOMCでは依然としてサブプライム急落によるリスクオフは潜在的ペソ急落リスクとして留意したい。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク
期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 73.50 ~ 77.00
INR/JPY 1.49 ~ 1.59

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【1月のドル/ルピーは下落した後、上昇した。】

ドル/ルピーは12月は月半ばに76.315の高値をつけた後、下押しする展開で年末は一時74.095まで下落し、2週間という期間ながらまとまった幅での下落を見せた。かかる中、74.34で年初取引をスタート。インドのアクティブ症例が17万人を超え、前週対比で2倍を記録し、またOPECはオミクロンが与える原油需要への影響は軽微であると評価し、日量生産40万バレルを維持したことから原油価格は高値圏での推移。加えて5日夜に公表されたFOMC議事要旨では22年3回の利上げが示唆されたことから米10年債が9か月ぶり水準まで利回り上昇となる。このように複数のドル高/ルピー安材料が並んだもののドル/ルピーは74.50でキャップされる展開。

2週目に入るとむしろ下押し展開で、11日にはカストディアン系のドル売りが出ていたとの話しや国内自動車金融サービス会社が4億7500万ドルの社債を海外で発行したことが話題で74.00を下抜け、当月の安値となる73.825を示現。その後13日までは74.00を挟んで73台を行ったり来たりした展開だったが、下値の下限が73.80と見るや外銀勢が既存のドル売りポジションの利益確定のためのドル買いを出したほか、国営石油小売がまとまったドル買いヘッジを入れたことからドル/ルピーは反転上昇。

3週目に入ると3月利上げを示唆する米地区連銀総裁の数が増え、年4回の利上げ予想へとハウスビューを上方修正する米系の銀行も複数見られる状況。原油もじり高の展開でドル/ルピーは一気に74.60まで戻る展開。この頃から「直近のルピー高の動きはファンダメンタルズから乖離した動きだった」との声が色濃く出始め、相場の雰囲気は明確に変化。ただし、国内大手鉄道金融事業者が社債で調達した5億ドルをインドに還流、天然資源開発会社も外債で資金調達を実施などルピー高肯定のヘッドラインもあり、ドル/ルピーの上昇は一旦落ち着きを見せる。

しかし、4週目に入るとウクライナの地政学リスク高まりから新興国が買いづらな雰囲気に加え、原油が一段と上昇したことからルピーには向かい風。注目されていたFOMCを通過すると、タカ派と捉えられたことから27日のドル/ルピーは大きく窓を開けてスタート。難なく大台75を回復、75.31の当月の高値をヒット。75.04で28日取引を終えた。

■ 今月の見通し

【2月のドル/ルピーは上昇しやすい展開を想定】

先月の本欄とメイン材料は基本的に変わらない。米国要因ではFOMCを通過し、FF金利先物、OIS共に本年12月FOMCまでで5回(計1.25%)の利上げを織り込んでおり、4回利上げを80%程度織り込んでいた1か月前から一段と利上げ観測が高まったと言って差し支えないだろう。多数派でこそないもの一部外銀では6回・7回の利上げを公式見解として予想する声も出始めている。併せて、FOMCでは明確な時期の言及は避けられたが、バランスシート縮小の時期についての観測も前倒しされている。かかる状況の中で、短期的にドル安を予想するのは勇気がいるだろう。

また、原油高も1か月前から一段と進行。プレントは90ドルを上抜け、2014年以來の水準に。先月発表されたインド貿易収支は既に過去最高を記録していたが今後更なる赤字拡大は自明の理。これに伴い経常収支赤字の悪化も想定され、実需と外国人投資家が共にルピーを売る展開が続くのでは。一方既述のように、インド企業の海外の債券市場の社債発行が活発。また、国内電気通信事業者がGoogleに株式を優先発行し、6億9500万ドルの調達を行うと発表したことや、インドの生命保険公社のIPOも予定されており、外国資金の流入が意識される。しかしこれらは天気にドル/ルピーを下押し要因となることはあってもルピー高トレンドを形成するには至らないだろう。

この後、インド連邦予算の発表と6日にはインド中銀会合が予定されているが、インド国債への影響はあれど、ドル/ルピーへの影響は大きくならないだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の床屋・美容室事情』

インドでも日本と同じように街中で床屋を見かける。日本にあるようなヘアサロンの外見をした建物から、個人で営んでいるような小さな床屋まであり、小さな床屋というのは本当に席が3つほどで店主が1人で対応しているような所だ。ちなみにこういった小さな所は外から店内の様子が丸見えなので、街を歩いているとカットしている風景によく遭遇する。このような街の床屋では男性が髪を切っているのを見かけることが多い。そして女性はというと、ほとんどの人がロングヘアである。少数派でショートヘアの女性も見ると、基本的に黒髪・長髪で、三つ編みのようにして束ねていたり、縛らずにそのまま自然に流して過ごしている。そしてこれがまたサリー姿によく似合っているのだ。

一方で男性のヘアスタイルは様々であるが、若い男性は特に刈り上げ/ツープロックスタイルにトップの毛を長く伸ばし、サイドで綺麗に分けて流しているようなスタイルが一般的なようだ。また、基本的に男性も女性も前髪を作らないのが主流である。

ヘアサロンに行けば日本円で1500円ほど、床屋では男性の場合、数百円ほどでカットしてくれる所もあるようだが、更にローカルな床屋では数十円でカットなんてこともあるそう。また、インドといえば見事なあごひげを蓄えた男性を想像するだろう。実際に多くのインド人男性がひげを生やしているが、もちろん床屋で髭の手入れをする男性も存在する。

床屋やヘアサロンでは写真でイメージを伝えても希望通りにカットしてくれないことも多いようで、特に日本人が髪を切る際は覚悟を持って臨むのが良いのかもしれない。(バンガロール・岩崎カンナ)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

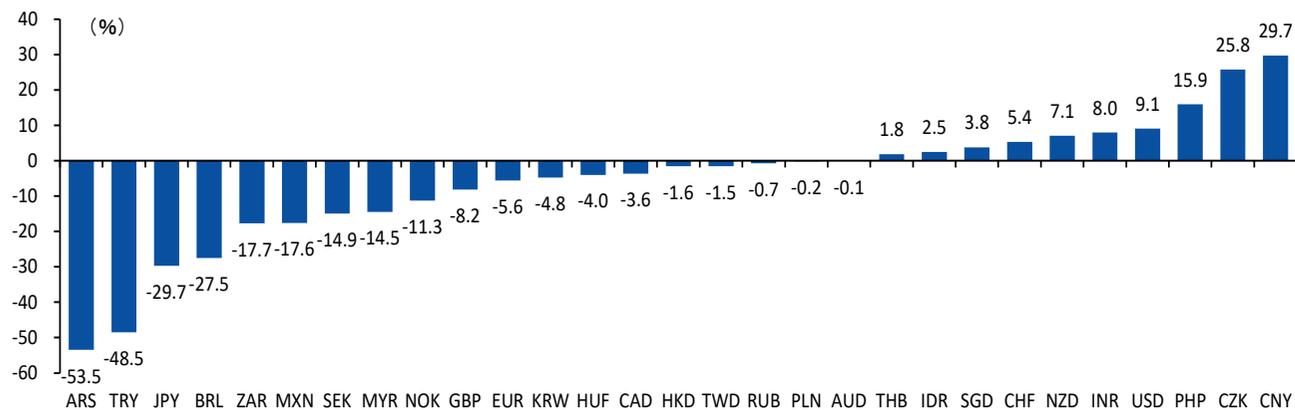
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/3	製造業PMI	12月	-	55.5	57.6
1/7	政府GDP予想値	FY21	9.50%	9.20%	-7.30%
1/12	鉱工業生産	11月	2.80%	1.40%	4.00%
1/12	CPI	12月	5.80%	5.59%	4.91%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2021年末	2022年1月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年1月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	36338.3	35131.86	-3.3%	-
日本	USD/JPY	115.08	115.11	0.0%	日経平均株価	28791.71	27001.98	-6.2%	-6.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	1.1235	-1.2%	ドイツDAX指数	15884.86	15471.2	-2.6%	-2.6%
英国	GBP/USD	1.3532	1.3447	-0.6%	ロンドンFTSE100指数	7384.54	7464.37	1.1%	1.7%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.7067	-2.7%	S&P/ASX200指数	7444.642	6971.632	-6.4%	-3.8%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.2708	0.6%	S&PTロント総合指数	21222.84	21098.29	-0.6%	-1.1%
エマーゼンゲアジア									
中国	USD/CNY	6.3561	6.3612	0.1%	上海総合	3639.775	3361.44	-7.6%	-7.7%
香港	USD/HKD	7.7966	7.7974	0.0%	香港ハンセン	23397.67	23802.26	1.7%	1.7%
インド	USD/INR	74.3375	74.6225	0.4%	インドSENSEX30種	58253.82	58014.17	-0.4%	-0.8%
インドネシア	USD/IDR	14263	14368	0.7%	ジャカルタ総合	6581.482	6631.151	0.8%	0.0%
韓国	USD/KRW	1189.88	1209.5	1.6%	韓国総合株価	2977.65	2663.34	-10.6%	-12.0%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.1855	0.5%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	1512.27	-3.5%	-4.0%
フィリピン	USD/PHP	50.992	50.975	0.0%	フィリピン総合	7122.63	7361.65	3.4%	3.4%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.3513	0.2%	シンガポールST	3123.68	3249.59	4.0%	3.9%
台湾	USD/TWD	27.674	27.835	0.6%	台湾加権	18218.84	17674.4	-3.0%	-3.5%
タイ	USD/THB	33.211	33.238	0.1%	タイSET	1657.62	1648.81	-0.5%	-0.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年12月時点)



■ 実質GDP成長率

	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-31.2	33.8	4.5	6.3	6.7	2.3	6.9	-3.4	5.7
日本*	-28.5	22.1	9.6	-2.9	2.0	-3.6		-4.6	
ユーロ圏	-14.5	-4.0	-4.4	-1.1	14.4	3.9	4.6	-6.4	
英国	-21.2	-7.8	-6.4	-5.1	24.2	6.8		-9.4	6.8
豪州	-6.0	-3.5	-0.8	1.4	9.5	3.9		-2.2	
カナダ*	-37.4	41.1	9.1	4.9	-3.2	5.5		-5.2	
エマーGINGアジア									
中国	3.1	4.8	6.4	18.3	7.9	4.9	4.0	2.2	8.1
香港	-9.0	-3.6	-3.4	8.0	7.6	5.5	4.8	-6.1	6.4
インド	-24.4	-7.4	0.5	1.6	20.1	8.4		6.8	6.5
インドネシア	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7	7.1			-2.0	
韓国	-2.7	-1.1	-1.2	1.9	6.0	4.0	4.1	-0.9	4.0
マレーシア	-17.2	-2.7	-3.4	-0.5	16.1	-4.5		-5.6	
フィリピン	-17.0	-11.6	-8.3	-3.9	12.0	6.9	7.7	-9.6	5.6
シンガポール	-13.3	-5.8	-2.4	1.6	15.3	7.1	5.9	-5.4	7.5
台湾	0.4	4.3	5.2	9.3	7.4	3.9	4.9	3.1	6.3
タイ	-12.1	-6.4	-4.2	-2.6	7.6	-0.3		-6.1	7.6

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	21/05	21/06	21/07	21/08	21/09	21/10	21/11	21/12	2020	2021
	(%)								(%)	
先進国										
米国	5.8	5.9	5.4	5.2	4.7	4.6	4.2	3.9	8.1	5.4
日本	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.8		2.8	2.8
ユーロ圏	8.0	7.8	7.6	7.5	7.4	7.3	7.2		7.9	7.7
英国	4.8	4.7	4.6	4.5	4.3	4.2	4.1		4.4	4.6
豪州	5.1	4.9	4.6	4.5	4.6	5.2	4.6	4.2	6.5	5.1
カナダ	8.0	7.6	7.4	7.1	7.0	6.8	6.1	6.0	9.6	7.4
エマーGINGアジア										
中国		3.9							4.0	3.9
香港	6.0	5.5	5.0	4.7	4.5	4.3	4.1	3.9	5.5	5.5
インドネシア									6.0	6.4
韓国	3.8	3.7	3.3	2.8	3.0	3.2	3.1	3.8	4.0	3.6
マレーシア	4.5	4.8	4.8	4.6	4.5	4.3	4.3		4.5	4.6
フィリピン	7.7	7.7	6.9	8.1	8.9	7.4	6.5		10.4	7.9
シンガポール	2.8	2.7	2.8	2.7	2.6	2.6	2.5	2.4	3.0	2.7
台湾	4.2	4.8	4.4	4.1	3.9	3.8	3.7	3.7	3.9	4.0
タイ			2.3							1.7

(資料)ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	21/04	21/05	21/06	21/07	21/08	21/09	21/10	21/11	21/12	2020	2021
	(前年比%)										(前年比%)
先進国											
米国	4.2	5.0	5.4	5.4	5.3	5.4	6.2	6.8	7.0	1.2	4.7
日本	-1.1	-0.8	-0.5	-0.3	-0.4	0.2	0.1	0.6	0.8	0.0	-0.3
ユーロ圏	1.6	2.0	1.9	2.2	3.0	3.4	4.1	4.9	5.0	0.3	2.6
英国	1.5	2.1	2.5	2.0	3.2	3.1	4.2	5.1	5.4	0.9	2.6
豪州			3.8			3.0				0.9	2.9
カナダ	3.4	3.6	3.1	3.7	4.1	4.4	4.7	4.7	4.8	0.7	3.4
エマーGINGアジア											
中国	0.9	1.3	1.1	1.0	0.8	0.7	1.5	2.3	1.5	2.5	0.9
香港	0.8	1.0	0.7	3.7	1.6	1.4	1.7	1.8	2.4	0.3	1.6
インド	4.2	6.3	6.3	5.6	5.3	4.4	4.5	4.9	5.6	6.6	5.1
インドネシア	1.4	1.7	1.3	1.5	1.6	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	1.6
韓国	2.5	2.6	2.4	2.6	2.6	2.4	3.2	3.8	3.7	0.5	3.7
マレーシア	4.7	4.4	3.4	2.2	2.0	2.2	2.9	3.3	3.2	-1.1	2.5
フィリピン	4.5	4.5	4.1	4.0	4.9	4.8	4.6	4.2	3.6	2.6	4.4
シンガポール	2.1	2.4	2.4	2.5	2.4	2.5	3.2	3.8	4.0	-0.2	2.3
台湾	2.1	2.5	1.8	1.9	2.3	2.6	2.6	2.9	2.6	-0.2	2.0
タイ	3.4	2.4	1.3	0.5	0.0	1.7	2.4	2.7	2.2	-0.8	1.2

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2020	2021
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.1	-2.5	-2.6	-2.9	-3.1	-3.2	-3.4	-3.0	
日本	3.4	2.8	2.7	3.0	3.0	3.5	3.4		
ユーロ圏	1.7	1.7	1.6	2.0	2.6	2.8	2.8	2.0	
英国	-1.9	-1.6	-1.3	-2.6	-2.5	-2.6	-3.3		
豪州	1.2	1.9	2.0	2.6	3.2	3.4	3.9		
カナダ	-2.0	-2.0	-2.0	-1.8	-0.9	-0.5		-1.8	
エマーGINGアジア									
中国	0.3	0.9	1.3	1.8	2.4	2.0	1.9		
香港	4.7	5.9	7.1	6.9	9.4	9.5	9.3		
インド	-0.8	0.4	1.3	1.3	0.9	0.4	-0.5		
インドネシア	-2.4	-2.1	-1.3	-0.4	-0.2	-0.1	0.2	-0.4	0.2
韓国	3.8	3.7	3.8	4.4	4.9	5.7	5.9		
マレーシア	2.8	2.5	3.5	4.4	4.6	4.8	3.8		
フィリピン	0.4	1.5	2.6	3.5	3.4	1.7	0.4		
シンガポール	14.8	15.6	16.8	17.6	18.5	19.0	19.5	17.6	20.6
台湾	10.4	10.7	12.8	13.9	14.6	15.2	14.3	13.9	
タイ	6.9	6.6	6.3	4.2	1.8	0.9	-1.7		

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■世界の政策金利

	現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
		日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項	
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2022/1/26	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2022/1/18	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/12/16	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2021/12/16	+15bp	2021/12/16	+15bp
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/12/7	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2022/1/26	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.70	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/1/20	-10bp	2022/1/20	-10bp
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/12/8	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2022/1/20	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.25	引き締め: 2021/8/26	0.50	2022/1/14	+25bp	2022/1/14	+25bp
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2022/1/20	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/12/16	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/12/22	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利を8レートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行